能登島町住民意識調査*

——架橋問題を中心に——

古野　有隣、八木　　正、石原多賀子

I　調査の概要

1　調査の意図

(1)　開放センターの調査研究事業

金沢大学・大学教育開放センター（本項のタイトル及び以下において開放センターと略す）は、昭和51年5月、学内共同教育研究施設として設置されたが、その基本的性格は大学と地域社会の接点として、大学の人的・物的機能を地域に還元することを意図した諸活動を実施することにある。具体的にはいくつかの形態による開放講座を開設して、市民への学習機会の提供活動を主たる事業として実施してきている。

この開放事業とならぶもう一つの柱が調査研究事業である。市民を対象とする開放事業の実施に当っては、基本的には市民の学習要求と、大学側の対応可能性が大きな要素となるが、前者を把握するために調査研究活動が必要である。これが、調査研究事業が開放センターの事業として位置づけられる一つの理由であり、もう一つの理由は当センターが教育研究施設であるところに求められる。つまり、地域社会と大学との接点としての位置と性格から生ずる役割として、地域社会の当面する諸問題へのアプローチが要求されるわけである。調査研究を通じて、地域社会の実態や問題を解明することは、それがただちに問題の解決につながることの有無は別として、地域社会への大学の一つの役割であることはまちがいないであろう。そしてさらにそれは、当センターの実施する開放事業にとっても無縁のものでないこともまちがいない。

(2)　能登島調査の場合

上記の如き趣旨に立って、当センターにおいてはいくつかの調査を手がけてきたのであるが、今回の能登島調査の場合は、前項で述べたもののうち、地域社会の諸問題を研究対象としてとりあげる側面のものである。対象地として能登島を選定した意味は、半島と当町を結ぶ架橋の建設が実現することになったところに基本的には存在している。一般に、離島に橋がかかることは島のあらゆる側面にきわめて大きな影響を及ぼすといわれる。交通、経済などはもちろんであるが、文化、生活行動、意識の面への影響も決して無視できないものである。そして、島民の学習活動、余暇行動など社会教育とのかかわりもまた大きいものと予想される。

このような意味において、能登島に架橋されるということは前記のような変化を研究対象として把えた場合、またとない機会であるということができるわけである。そしてまた、予想されるそのような変化にどう対応していくかということは能登島町にとって大きな地域課題となってくることであり、そのための資料を提供することにもなるであろう、というのが、この調査を当センターの事業として位置づける趣旨ということになる。

*昭和54年2月15日受理

2　調査の概要

(1)　調査の内容

前述の如き調査の意図に即して、調査の内容として取り上げたものは以下の如き項目としてあげられる。

①　架橋をめぐる意識（認知、期待、予測など）

②　地域についての意識（地域観、地域問題の解決方法、将来像、居住意志など）

③　生活についての意識（生活行動圏、生活上の悩み・不満、生活期待感など）

④　学習についての意識（学習要求、学習参加状況、大学開放をめぐる意識など）

以上は調査対象者に対する調査票調査の内容として属性などとともにもりこまれたものであるが、その他役場、教育委員会などの資料による調査も並行して実施した。

(2)　調査の規模など

①　調査の時期

調査票による調査は昭和53年2月の上旬約10日間の間に実施し、資料の収集、聴取は53年1月及び53年2月に役場、教育委員会等を訪問して実施した。

②　調査の対象

昭和53年2月現在の能登島町の住民のうち20才～59才までの2,167名を調査対象者とし、1,888名から調査票を回収した（回収率87.1%）。

（古野　有隣）

II　能登島の産業・生活状況と架橋問題

1　対象地域の産業・生活状況

(1)　立地・交通の条件・開発の推移

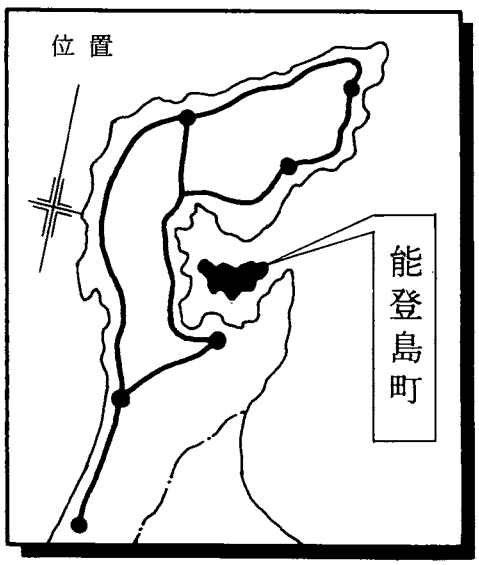
能登島は能登半島七尾湾内に横たわる、総面積 47.45km² （周囲 72km ）におよぶ、大きい離島である。東に富山湾をひかえ、南は七尾南湾を隔てて七尾市を臨み、西は三ケ口瀬戸を狭んで中島町と相対し、北は穴水町との間に七尾北湾を擁している（図II－1）。また、本島は旧村単位に東部（祖母ケ浦、八ケ崎、鰻目、長崎、野崎、日出ケ島、二穴）、中部（向田、曲、島別所、佐波）、西部（須曽、半浦、南、無関、閏、久木、田尻、通、百万石）に分かれている（図II－2）。

現在能登島への交通は、国鉄七尾駅から七尾港まで陸上 1km、七尾港から能登島の波止場である佐波まで海上 6 km をカーフェリー定期船（所要時間約 25 分）が 5 往復している。そのほかに随時臨時便が運行されているので、日常的にはさほど重大な支障は生じていないといえよう。佐波からは、島内 4 つの路線バスが定期船に接続して運行されている。なお、七尾―鰻目間にも定期船 1 往復がある。

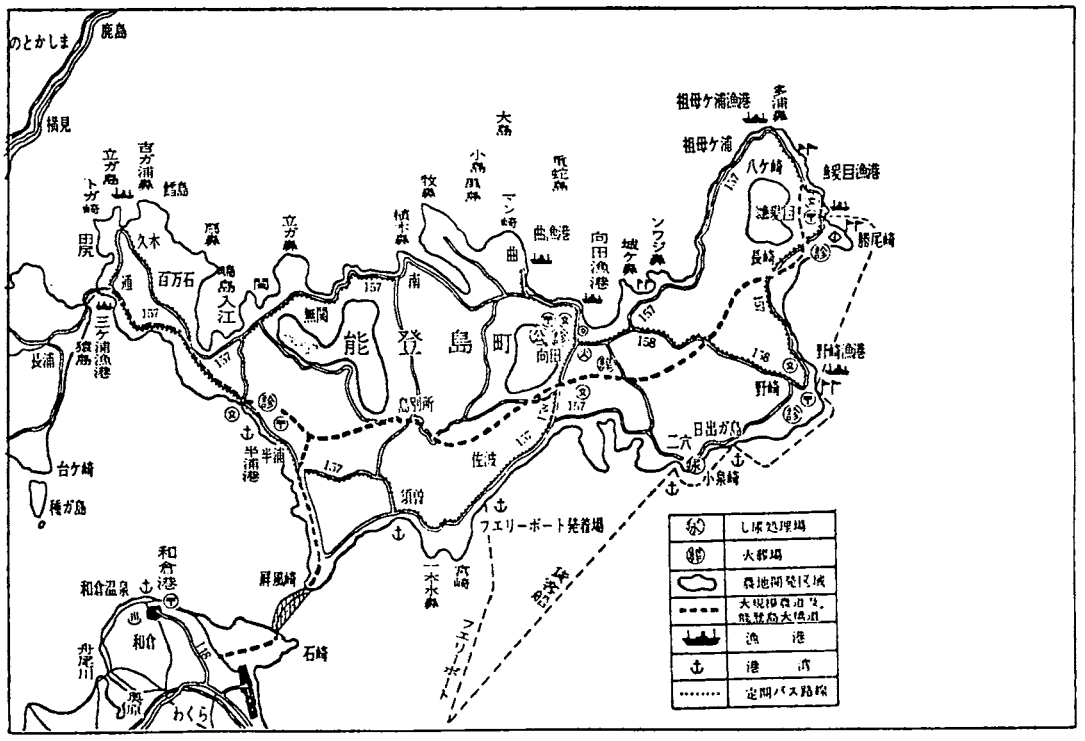
現在架橋工事の着工態勢に入っている「能登島大橋」は、能登島西部の半浦と七尾市石崎町との間の屏風瀬戸を結ぼうとするもので、将来さらに能登島町の通（西部）と中島町長浦との間の三ケ口瀬戸にも、農道橋を架けることが計画されている（図II－2）。

気候は、四囲が内海であるために、概して温和（最高34℃ 、最低 2℃）で、積雪も石川県では最も少い方（山間部 0.3～0.4 m、平担部 0.2～0.15 m）に属する。根雪期間は 30～50 日である。

能登島の最高峰は四村塚山（198 m）で、これを頂点に東西にゆるやかな傾斜の丘陵が走って



図II－1　能登島町の位置



図II－2　大橋の架橋位置

表II－1　土地利用

総土地面積	耕地			山林				宅地	その他
	田	畑	計	人工林	天然林	その他	計		
47.75 km^2	644 ha	199 ha	843 ha	690 ha	2,287 ha	59 ha	3,036 ha	40 ha	826 ha

いる。丘陵地帯は山林と畑地からなり、谷間や浅海埋立地が水田耕地として利用されている。目立つ河川はない。**土地利用の状況**は、**表II－1**に示されている。

能登島は、周囲を海に囲まれているので、漁業もひじょうに盛んであり、かつては製塩業も行われていたと伝えられる。また、古来より海上交通の要地となっていたと思われる（流刑地でもあった）。

能登島の近代以降の主要な開発の推移を列挙すれば、およそ次のようになるだろう。

明治18年頃　曾良義三（穴水町）が私費を投じて曾良～向田、佐波～七尾間の航路を開く。郵便船として１日２往復。

22年　市町村制施行により、部落を統合して西島村、中乃島村、東島村の三村となる。

44年　電話開通。

大正　５年　各村に青年団が組織される。

昭和　３年　電灯がつく。

5年頃　七尾へ通学（中学校）する船便がつくられる。
22年　村長公選となる。
26年　能登島総合開発期成同盟会発足。
28年　鰕目地区に初の簡易水道敷設。
29年　離島振興法により、部落を連絡する道路を敷設。
（12月）能登島架橋の実現を国に対して要望。
この頃、七尾西湾干拓問題持ち上がる。
30年　三村が合併し、能登島町となる。
34年　農林省、七尾西湾干拓に調査費つける。
35年　三ケ台開拓事業竣功（開墾面積62.5ha）、百万石部落誕生（戸数13戸、人口54人）。
37年　テレビ中継所開局。
40年　（7月）北陸農政局、七尾西湾干拓実施計画（1,400ha）をまとめる。
41年　（7月6日）能登島架橋建設期成同盟結成大会。
（7月15日）能登商船カーフェリー、七尾～佐波間に就航。
41～2年頃　「橋をかける会」、有志で結成される。
42年　能登島バス運輸（株）、資本金800万円で発足。
（8月）七尾・能登島間架橋建設期成同盟会結成。
43年　県水産試験場能登島分場落成。
44年末　七尾西湾干拓問題、棚上げとなる。
45年　過疎地域振興計画策定。
七尾・能登島間架橋建設基本構想を策定。
48年　農村地域集団電話開通（電話加入率99%となる）。
（8月）七尾・能登島間架橋早期建設決起大会開催。
50年　県が能登島連絡環境アセスメントを実施。
51年　（7月31日）七尾・能登島間架橋調査ボーリング始動式。
53年　（2月）県議会が能登島大橋有料道路建設を可決。
（10月）県営大規模農道建設第1期工事着工。
（11月）電話の自動化なる。
54年　（1月）能登島大橋有料道路建設事業に新規工事費（5億3千万円）計上される。

(2) 産業の概況と持質

産業別就業人口（表II－2）によると、全体的にみれば第1次産業従事者の比率は多いものの、時期別にみると、他地域と同様、激減の一途をたどっており、それに代わって第2次産業が急伸し、第3次産業も昭和45年以降急に増大している。

表II－2　産業別就業人口（15才以上）

（単位　人）

年　度	総　　数	第1次産業	第2次産業	第3次産業
35	3,021	2,571	92	358
40	2,475	2,045	107	323
45	2,419	1,843	208	368
50	2,352	1,417	397	538

資料：国勢調査

表II－3　産業（大分類），従業上の地位，男女別15歳以上就業者数

地域，産業（大分類） Area and industry (major groups)	男 Male 総数 Total 1)	雇用者 Employees	役員 Directors	雇人のある業主 Employers	雇人のない業主 Self-employed persons 2)	家族従業者 Family workers	女 Female 総数 Total 1)	雇用者 Employees	役員 Directors	雇人のある業主 Employers	雇人のない業主 Self-employed persons 2)	家族従業者 Family workers
405 能登島町 Notojima-machi												
総数 All industries	1201	400	10	60	594	136	1151	295	1	5	119	730
A 農業	572	7	—	17	444	104	704	6	—	—	73	625
B 林業，狩猟業	3	—	—	—	3	—	1	—	—	—	—	1
C 漁業，水産養殖業	107	49	—	5	40	13	30	1	—	—	—	29
D 鉱業	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
E 建設業	155	90	1	18	41	5	19	16	—	—	—	3
F 製造業	78	27	5	11	24	11	144	102	1	2	4	35
G 卸売業，小売業	34	20	—	3	11	—	77	36	—	3	21	17
H 金融・保険業	8	8	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—
I 不動産業	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
J 運輸・通信業	69	60	—	2	6	1	13	12	—	—	—	1
K 電気・ガス・水道・熱供給業	4	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
L サービス業	99	65	3	4	25	2	147	107	—	—	21	19
M 公務	67	67	—	—	—	—	13	13	—	—	—	—
N 分類不能の産業	4	2	1	—	—	—	2	1	—	—	—	—

資料：昭和50年国勢調査

表II－4　農作物作付面積、収穫量

（単位　ha・t）

年次	水稲		いも類		野菜		果樹		タバコ		なたね		飼料作物		マメ類	
	面積	収穫量	面積	収穫量	面積	収穫量	面積	収穫量	面積	収穫量	面積	収穫量	面積	収穫量	面積	収穫量
49	516	2,370	14	243	33	771	27	45	68	170	9	15	4	128	28	36
50	529	2,510	14	251	33	742	27	47	68	154	5	8	2	65	28	37
51	529	2,120	13	229	32	665	27	44	73	150	—	—	2	65	25	31

資料：石川県統計書

表II－5　主な畜産の状況

年度	肉用牛		肉豚		鶏（卵）	
	飼育数	生産量	飼育数	生産量	飼育数	生産量
40	176 頭	52.8 t	173 頭	16.0 t	— 千羽	110 t
45	81	24.3	247	22.0	—	750
50	140	42.0	300	27.0	115	1,470

資料：農業センサス

さらに**産業別に細かく**みた**表II－3**によれば、およそ次のような状況となっている。

第1次産業従事者の内訳は、総数1,417人のうち、農業が1,276人（男572人、女704人）、漁業および水産養殖業は137人（男107人、女30人）で、林業および狩猟業は4人とほとんど無視しうる。

第2次産業のばあいは、総数397人のうち、製造業222人（男78人、女144人）、建設業174人（男155人、女19人）となっていて、鉱業は皆無に等しい。

第3次産業総数538人のうち、サービス業246人（男99人、女147人）、小売業111人（男34人、女77人）、運輸通信その他82人（男69人、女13人）、公務80人（男67人、女13人）の順となっている。

本町の基幹産業はやはり**農業**であり、米を主要作目とする零細兼業農家が大半を占めている。

そのほかに目ぼしいものといえば、葉タバコの栽培があり、一部では果樹（桃）も手がけられている（**表II—4**）。**畜産**は肉豚、肉牛を主にしている（**表II—5**）。

規模別専兼別農家数（**表II—6**）によると、専業農家は全般に少く、兼業農家が圧倒的であるが、そういうなかで第1種兼業は中規模農家に多く、第2種兼業は零細農家に偏っていて、明確な階層差を示していることが注目される。平均的な経営規模（0.8ha強）は、能登地方ではむしろ大きい方に属している。

漁業は、農業とならぶ重要産業である。**表II—7**にみるように、主な漁法は定置網、底引き網、刺網、ナマコ桁網、モズク採取、ハマチ養殖からなっている。魚種は定置網ではタラ、フクラギ、サバ、イワシなど、刺網ではメバルが主なものである。これらの豊富な漁獲物が能登島観光の目玉であり、釣り客の誘致や民宿経営と密接につながっている。なお、専業漁家は皆無とみてよく、すべてが兼業漁家である。

林業家と目すべきものも無いに等しいが、**所有形態別林野面積**をみると、昭和50年現在、国有は0、公有は5ha とネグリジブルであり、あとの 2,993ha がすべて私有である。所有規模の零細な林野所有者が多数存在しているわけである。主な樹種は赤松、杉、檜、雑木からなり、このうち約75%は天然林である。山間部の高度利用をめざして、現在造林事業が行われている。特記すべき林産物には乏しいが、マツタケの減少に対処するために、その人工増殖が県林業試験場の指導を受けて推進されている。

また町内全域が猟区に設定され、ハンターが訪れているが、禁猟区や休猟区を定めたり、獲物を制限したりして、島獣の保護に努めている。毎年日本キジの放鳥を行い、

表II—6　専兼別の農家数（昭和50年）

	農家数	専業農家	兼業農家	
			第1種	第2種
0.3 *ha* 未満	51	4	3	44
0.3 ～ 0.5*ha*	110	6	13	91
0.5 ～ 0.7	148	7	24	117
0.7 ～ 1.0	168	8	49	91
1.0 ～ 1.5	188	8	74	106
1.5 ～ 2.0	74	5	48	21
2.0 ～ 2.5	11		8	3
2.5 ～ 3.0	9	2	5	2
3.0 ～ 5.0	3		3	
合　計	762	40	227	495

資料：「農業センサス」

表II—7　漁業種類別漁獲量

（単位　t）

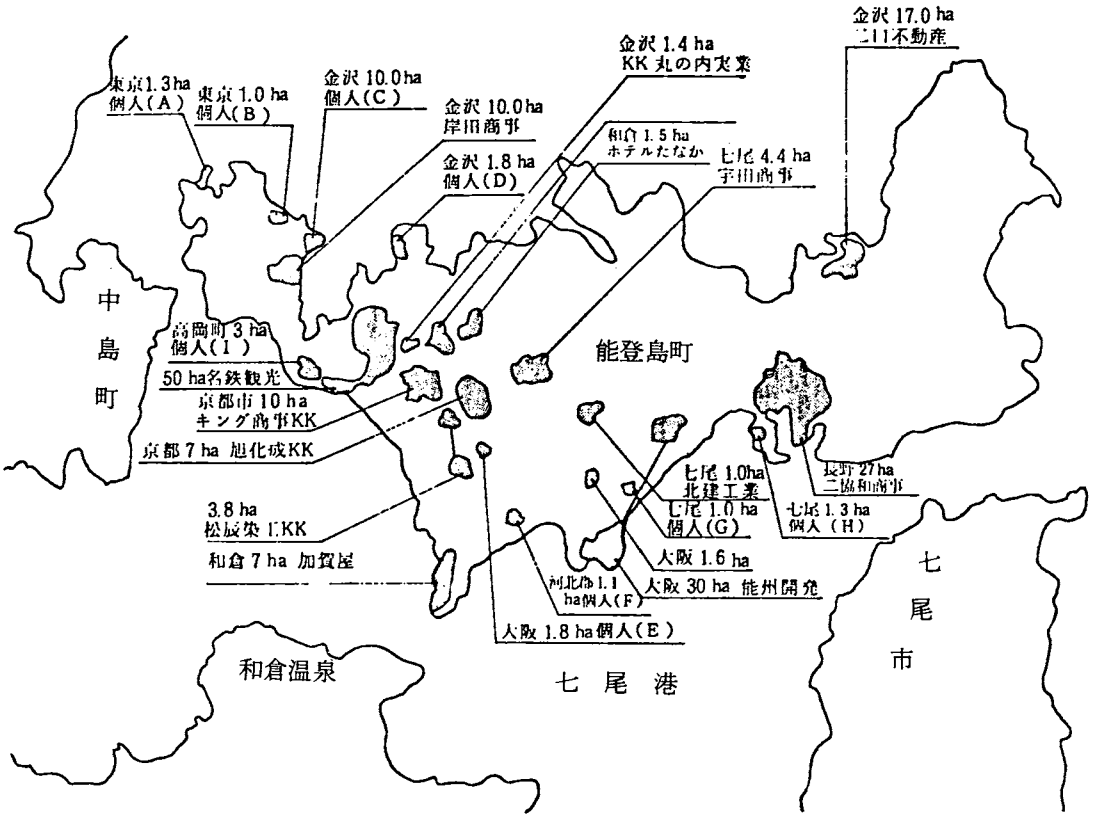
年次	総数	底引き網	さし網	はえなわ釣り	大型定置網	小型定置網	採貝	採草	その他の漁業
49	4,684	356	292	38	2,193	1,252	28	428	97
50	3,974	479	348	32	1,403	1,275	27	338	72
51	4,810	547	298	30	2,692	686	3	514	40

資料：石川県統計書

表II—8　事業所および製造品出荷額

年次	総数				繊維工業				木材・木製品				電気・機械				その他の製造業			
	事業所数	従業者		製造品出荷額	事業所数	従業者		製造品出荷額	事業所数	従業者		製造品出荷額	事業所数	従業者		製造品出荷額	事業所数	従業者		製造品出荷額
		男	女			男	女			男	女			男	女			男	女	
	戸	人	人	万円	戸	人	人	万円	戸	人	人	万円	戸	人	人	万円	戸	人	人	万円
49	62	78	184	30,200	40	40	84	14,590	3	6	1	820	4	9	73	6,600	15	8	26	8,190
50	52	52	204	28,295	33	34	70	12,307	3	6	3	1,100	3	12	117	12,490	13	—	14	2,398
51	50	73	290	39,643	34	38	73	17,080	3	7	3	1,260	4	13	138	12,570	9	15	76	8,733

資料：工業統計



図II－3　能登島の土地買い占め状況（昭和 49 年）

注：北陸経済調査会『能登島と架橋』(1978) による。

その増殖も図っている。釣り客に次いで、**狩猟**は観光客誘致に役立っている。

工業にはめぼしいものがなく、当地開発のひとつの課題となっている（**表II－8**）。現在あるのは、機業場、縫製工場、自動車整備工場ぐらいのものである。架橋により、特に基盤重力度の高い東部地区に工場誘致がもくろまれているが、同地区の水不足が大きなネックとなっている。むしろ無尽蔵といわれる、硅藻土の資源を活用する工業の育成の方が、はるかに有望といえよう。

架橋による観光地化が近い今、望まれているのが地元**商業**と**サービス業**の振興である。サービス業では、釣り客などのための民宿は、向田 6 軒（収容人員 200 名）、半浦 6 軒（同 200 名）、鰕目 9 軒（同 500 名）、野崎 4 軒（同 150 名）とわりあい数は多い。一方、すでに外部資本が土地を買い占めたり、**別荘地**を造営している（**図II－3**）が、このまま推移すると、旅館・商業部門への外部観光企業の進出を招きかねない。ちなみに町役場では、「家族旅行村」の指定を働きかけるなど、保養観光をめざしている。

島の長男層の主な就業先が、町役場、農協、漁協、郵便局、消防団などの公共機関というのが現状である。総じて、日銭の稼ぎ先が多い反面、男子労働力の安定就業の条件の欠けているのが、本島の産業構成の特色であるといえよう。

(3)　住民生活の状況と動向

部落別人口の構成と推移を**表II—9**にみると、35年当時との比較では、どの集落をとってみても、人口の大量流出は明白であり、島全体の過疎化は否定すべくもない事実である。ただ45年と対比すると、減少の勢いは鈍ってきており、中心集落である向田ではかえって増加の勢いをみせている。そのほか、漁業の盛んな東部地区の集落のなかには、現状維持か反転増加の兆しをみせているところがある。養殖が行われている西部地区でも、そういう傾向が認められる。

この島の**人口の動き**の特徴というべきことは、若者はすべて就学その他でいったんは島の外に出ていることであり、そして家を継ぐために長男層がふたたび島に戻って、働き口を近辺に求めていることである。この動きはいわばこの島の伝統的パターンであり、**次三男層**の移出は、家の生活基盤を守るために必然的にとられざるをえない措置なのである。むろん教育の普及と生活様式の都市化が、長男層をまきこむ形で、若者の都市への志向をつのらせていることはまちがいない。

戻ってきた**長男層**は、家業である農業に精励することはせずに、農用機械を買いこんでそれを休日作業で済ませ、若夫婦共ども別の働き口を求める傾向が強い。その格好の安定就業先が、前述の役場を初めとする公共機関であり、役場での職場結婚も多いといわれる。

こうして「給料とり」になることが、青年層とその親たちの希望となるが、一方、たとえ定職に就かなくとも、漁業、農業、土木業などに日稼ぎのチャンスが数多くあるので、住居の心配も要らず、「食うには困らない」ということになれば、きわめてのんびりした生活態度が形成されても、いっこうに不思議ではない。

島にはたしかに若者向きのレジャー施設は乏しい。しかしあたかも家を継ぐ代償であるかの

表II—9　部落別人口

（単位　人）

部落名		35年の人口	45年の人口	50年の人口	男	女	世帯数	一世帯当り
町の総数		5,458	4,219	4,139	1,977	2,162	973	4.2
東	祖母ケ浦	217	160	160	80	80	35	4.5
	八ケ崎	188	120	126	59	67	26	4.8
	鍛目	619	479	456	219	237	108	4.2
	長崎	167	120	131	63	68	24	5.4
	野崎	711	587	573	285	288	121	4.7
	日出ケ島	56	43	42	21	21	11	3.8
	二穴	164	140	134	65	69	26	5.1
中	向田	722	554	596	285	311	153	3.8
	曲	455	391	366	182	184	86	4.2
	島別所	141	97	87	45	42	24	3.6
	佐波	143	95	91	42	49	24	3.7
西	須曽	423	326	313	134	179	80	3.9
	半浦	422	346	330	159	171	81	4.0
	南	165	109	108	46	62	27	4.0
	無関	148	111	104	48	56	24	4.3
	閨	328	257	233	107	126	57	4.0
	久木	110	83	80	40	40	17	4.7
	田尻	92	62	56	24	32	14	4.0
	通	145	105	121	55	66	27	4.4
	百万石	42	34	32	18	14	8	4.0

資料：国勢調査

ように、長男層には自家用車が買い与えられ、彼らは思いのまま遠出することができる。日常的にはむろん七尾へ遊びに行くことが多い。

現在の**親たち**の世代層も、基本的にはこれと同じパターンで年月を重ねてきたものであり、現在も農業や漁業を基本としながらも、日稼ぎ兼業に依存する生活構造をもっている。

婦人層もまた、農作業、漁業手伝い、織物業、縫製業などに従事しているが、女性の方は七尾市への通勤者が多く、かまぼこ工場その他の事業所で働き、なかには和倉温泉へ賄い婦・仲居として働きに出ている者もいる。

通勤・通学の状況（**表II—10**）をみると、圧倒的に七尾市との関係の深いことがわかる。就学者のなかには、通学者のほかに、親せき・知人が七尾に多いこともあって、100名近くの下宿生がいる。七尾からさらに離れたところへ通学することもある。七尾への就業者は、男性よりも女性の方が多くなっている。

表II—11から**農業者の兼業従事者数**（昭和50年）をみると、男では恒職者270人を上まわる288人が、日雇・臨時の仕事に従事しており、出稼ぎ者も44人を数える。女の方は恒職184人に対して、日雇・臨時は実に345人に達しており、出稼ぎ者も20人いる。

これを**農家単位**でみれば、**表II—12**のようになる。鹿島郡の他の町村と較べると、第1種兼業農家、第2種兼業農家とも、恒常的賃労働勤務に対して、恒常的職員勤務の比率の高いことが強く印象づけられよう。また、1兼農家では人夫・日雇の比率がずば抜けて多いことも注目される。

ひと昔前と較べると、皆が働きづくめになったといわれる。そうさせる最大の要因は、子弟の**教育費**の圧迫であろうと思われる。親たちは、子女の希望を容れてこぞって高等教育を受けさせるので、その経費を稼ぎださなくてはならないのである。

家を継がせるために長男・長女は呼び戻すが、前記のように、親・子女共ども農漁業に専念する気はまったくなく、役場などに就職することを望んでいる。高級車に乗って通勤する青年の姿がみられ、親としては、乗用車、ライトバン、農機具、バイクを揃えないと、息子を引きとめられないという。町民の工場誘致への希望は根強いが、

表II—10　能登島町の通勤・通学状況

	総　数	就業者	通学者
当地に常住する者	2,626	2,352	274
自市区町村で従業・通学	2,237	2,192	45
自　宅	1,602	1,602	—
自宅外	635	590	45
他市区町村で従業・通学	389	160	229
県内	389	160	229
七尾市	322	147	175
田鶴浜町	23	—	23
中島町	17	2	15
その他の市町村	27	11	16

資料：国勢調査（昭和50年）

表II—11　兼業従事者数（昭和50年）

単位：人

	男					女				
	計	恒職	出稼	日雇臨時	自営	計	恒職	出稼	日雇臨時	自営
能登島町	927	270	44	288	426	787	184	20	345	301
東島	395	118	13	121	197	336	84	9	141	135
中乃島	230	75	26	76	69	194	41	7	113	44
西島	302	77	5	91	160	257	59	4	91	122

資料：「農業センサス」

表Ⅱ—12　家としての主な兼業種類別農家数

(1)第１種兼業農家

単位：戸

		雇用兼業農家					自営兼業農家			
		計	恒常的職員勤務	恒常的賃労働勤務	出かせぎ	人夫・日雇	計	林業	漁業	その他
鹿島郡										
田鶴浜町	401-0	127	21	41	2	63	39	5	16	18
田鶴浜町	401-1	51	9	17	1	24	23	1	13	9
相馬村2－1	401-2	44	6	15	1	22	5	2	—	3
金ケ崎村	401-3	32	6	9	—	17	11	2	3	6
島屋町	402-0	184	37	108	2	37	24	2	—	22
島屋町	402-1	163	36	96	2	29	19	—	—	19
相馬村2－2	402-2	21	1	12	—	8	5	2	—	3
中島町	403-0	325	43	79	5	198	90	36	26	28
笠師保村	403-1	37	5	9	—	23	26	6	15	5
豊川村	403-2	105	15	27	2	61	13	1	1	11
熊木村	403-3	44	4	16	1	23	7	1	1	5
西岸村	403-4	41	5	9	1	26	18	8	8	2
中島村	403-5	33	6	8	—	19	3	—	1	2
鉈打村	403-6	65	8	10	1	46	23	20	—	3
鹿島町	404-0	357	45	221	2	89	35	5	—	30
越路村	404-1	78	7	39	—	32	4	1	—	3
御租村	404-2	127	17	81	—	29	14	2	—	12
滝尾村	404-3	98	14	64	—	20	13	2	—	11
久江村	404-4	54	7	37	2	8	4	—	—	4
能登島町	405-0	193	29	21	10	133	129	2	102	25
東島村	405-1	47	9	8	7	23	63	1	51	11
中乃島村	405-2	85	11	7	—	67	15	1	10	4
西島村	405-3	61	9	6	3	43	51	—	41	10
鹿西町	406-0	137	18	75	—	44	13	2	—	11
能登部町	406-1	80	11	47	—	22	8	2	—	6
金丸村	406-2	57	7	28	—	22	5	—	—	5

(2)第２種兼業農家

単位：戸

		雇用兼業農家					自営兼業農家			
		計	恒常的職員勤務	恒常的賃労働勤務	出かせぎ	人夫・日雇	計	林業	漁業	その他
鹿島郡										
田鶴浜町	401-0	500	131	231	7	131	240	3	10	227
田鶴浜町	401-1	239	74	115	3	47	121	1	4	116
相馬村2－1	401-2	119	19	47	3	50	84	2	—	82
金ケ崎村	401-3	142	38	69	1	34	35	—	6	29
島屋町	402-0	360	111	208	2	39	333	3	—	330
島屋町	402-1	332	104	195	—	33	266	—	—	266
相馬村2－2	402-2	28	7	13	2	6	67	3	—	64
中島町	403-0	978	198	347	47	386	249	10	44	195
笠師保村	403-1	149	52	52	3	42	41	—	20	21
豊川村	403-2	213	44	69	18	82	40	2	—	38
熊木村	403-3	157	26	65	5	61	51	—	1	50
西岸村	403-4	184	21	73	1	89	66	5	22	39
中島村	403-5	60	22	24	3	11	24	—	1	23
鉈打村	403-6	215	33	64	17	101	27	3	—	24
鹿島町	404-0	606	211	320	3	72	428	3	—	425
越路村	404-1	303	90	175	1	37	176	2	—	174
御租村	404-2	106	42	51	—	13	76	—	—	76
滝尾村	404-3	166	66	80	1	19	156	—	—	156
久江村	404-4	31	13	14	1	3	20	1	—	19
能登島町	405-0	308	74	69	19	146	162	—	64	98
東島村	405-1	145	21	43	7	74	51	—	18	33
中乃島村	405-2	82	28	17	9	28	34	—	9	25
西島村	405-3	81	25	9	3	44	77	—	37	40
鹿西町	406-0	340	118	181	1	40	134	1	—	133
能登部町	406-1	227	82	119	1	25	91	1	—	90
金丸村	406-2	113	36	62	—	15	43	—	—	43

資料：農林業センサス

それは青・壮年層の安定就業のためであり、かならずしも町の産業振興を願う気持から発したものとはいえない。町のある有識者は、「給料とりになることだけが目的なら、外へ働きに出るのと同じことだ」と語っている。

町当局が**長期振興計画**の要としているのは、大規模農道の敷設にともなう営農団地の造成と架橋による観光開発、さらに農漁業と保養・観光との結合である。広大な山林原野の開発利用も重要課題となっている。問題は、これらの産業振興計画を支える人的要素をいかに編成して行くか、にかかっているといえよう。

2　架橋問題への対応

(1)　架橋問題の背景と動き

能登島は離島とはいえ、陸地ときわめて接近しており、だからこそ架橋が現実の問題となりうるのである。しかしそれだけに、島民の**架橋にかける夢**は大きくふくらみ、かつ長い間抱きつづけられ、いわば宿願・悲願となっていた。

昭和41年にカー・フェリーが就航するまでは、発動機船が1日3回往復する程度であった。また、29年に離島振興法により各部落を連絡する道路を敷設するまでは、歩く道だけしかなく、隣部落へ行くにも櫓舟を利用せざるをえなかったところもある。当時、島は三村に分かれていて、相互の連携もなく、まして島全体の統合の観念もなかった。

26年に早くも、三村一致した架橋のアドバルーンが、現公民館長らの手によってあげられている。交通の不便が、島民の胸にいたく痛感されていたからである。30年に三村の合併がなり、町として架橋の実現を国にたいして働きかけるようになった。

ただこの頃から、農地の少い中島町、田鶴浜町から七尾西湾干拓の話がもちあがり、七尾市と周辺各町をふくむ、干拓期成同盟が結成されている。36～9年頃に大きく盛り上がったこの構想は、農地、工業用地、淡水湖を造成し、能登島まで陸続きにしようとする、雄大な計画だったのである。しかしノリやカキ貝の養殖漁民からの反対にあい、国や県の対応にも手違いが生じて、44年末には計画は打ち切りとなった。

一方、41年に待望のカー・フェリーが就航する前後から、架橋への熱意は急速な盛り上がりをみせ、能登島架橋建設期成同盟が結成され、また「橋をかける会」が青年団ＯＢの有志7～8名により自然に結成された（現在会員約30名）。そして翌42年には、七尾市とタイアップして、七尾・能登島間架橋期成同盟会も組織されるに至った。

45年には、町は過疎地域振興計画と併わせて、架橋建設基本構想を策定し、さらに48年には、早期建設決起大会も開催されている。

これらの動きを受けて、50年に至ってようやく県当局も対応し、53年になって県議会が能登島大橋有料道路建設を正式に可決する運びとなった。一方、同年10月には県営大規模農道建設工事にも着工、能登島開発の基盤は急テンポに着々と整えられつつある。折からの不況克服のために、県が国から大規模建設事業を奨励されたことが、タイミングとして幸いしたといえよう。

こうして54年に新規工事費が計上され、架橋工事はいよいよ始動態勢に入っている。現在、島内西部地区では、取付け道路の工事がすでに進行中である。

架橋工事の概要は、総事業費40億円、橋の長さ1,025ｍ、幅員8.9ｍ（その内、歩道1.5ｍ）、取付道路1,125ｍとなっている。年度別工程は、52年度＝海底調査、ボーリング、概略設計、53年度＝環境アセスメント調査、ボーリング、詳細設計、54年度＝橋の下部工事、用地補償、

道路工事、55年度＝橋の下部工事、上部工事、道路工事、56年度＝橋の下部工事、上部工事、道路舗装工事、料金所工事、安全施設工事の予定である。

町の基本構想によれば、架橋の効果として次のような事項がある。これには行政当局の架橋にたいする意義づけと期待がよく表われているので、長文だが収録しておきたい。

「**架橋による経済的効果**――まず直接的効果として輸送費用の節約、輸送時間の短縮、交通手段の選択、自宅からの通勤可能、夜間などの緊急体制の確立など福祉的施策の確定が図られる。また間接的な効果としては、生産輸送の合理化を図り、従来の生産計画に対し、飛躍的なレベルアップを図ることができる。また架橋によって能登島町の産業の立地条件が改善され、新しい産業の立地が期待され、地域格差の是正をうながすものである。そしてまた、資源開発も一段と促進され、資源価値を上昇させ、特に観光資源を効率的に開発させるのには有利である。また流通機構の合理化と市場圏の拡大が住民の生活に対し、大いに経済効果をもたらすことは明らかである。

観光開発効果――今後のレクリエーションは、増々広域化しており、大規模化されつつある。したがって海浜レクリエーション・リゾート構想は架橋により大いに効果をあげていくものである。その基本的配置形態として、次のようなものがあげられる。キャンプ場および臨海学校、青少年センターまたはゼミナール・センター、ゴルフ場、遊園地、自然公園、スポーツ施設、各種レジャー施設、水中公園、松茸山などの自然資源保存区域の指定などである。

観光ルートの拡大化――和倉温泉とタイアップし、半ノ浦温泉を利用して二次的宿泊地とする。和倉・能登島間を架橋で結び、能登島・奥能登をフェリーで結ぶ交通体系が確立される。

第1次産業開発効果――〔農業〕架橋により生産体制、経営形態の改善などが飛躍的にレベルアップするものと思慮される。と同時に共同栽培管理施設（農業機械、育苗施設、管理施設等）を設け、計画的生産、出荷体制の整備をすすめる。また、島の特質を生かし薬草類、嗜好性食品の栽培をすすめてその特産化を図る。

〔畜産〕架橋の実現は輸送費、輸送時間の大巾短縮など流通の促進を図るため、畜産の振興をすすめるのに有利な条件となる。今後島内では畜産物の生産が増えるものとみられ、このためには飼料畑の開発など自給飼料の確保と、また経営の安定をはかるため、共同飼料管理施設、共同出荷施設、防疫施設など共同化をすすめながら、副業的経営から漸次専業経営、団地化と経営形態の移行を図る。

〔漁業〕養殖漁業の普及推進を図る。具体的には、七尾北湾を利用した大規模な養殖漁業（車エビ、タコ）、箱名入江などの沈降湾を利用した高級魚の養殖（鯛、はまち）、真珠・のり・わかめ・ホタテ貝・天草などの養殖、その他浅海の多面的利用の促進、これらの計画的な生産および出荷体制が可能になり、共同化が推進される。また観光資源としての漁業も考えられるのである。フイッシング・センターの計画、水中公園の建設、これらは食べさせる漁業、見せる漁業として、多角的観光漁業を推し進めていく。釣人口の増加および和倉温泉観光客を入れたばあい、メリットは十分とれるはずである。またこれらの漁獲物の計画出荷、適正販売など販売流通組織体制の確立とともに、真珠・のりおよび水産物の加工をはかり、特産化をすすめるよう整備する。」

数少い住民サイドの自主的運動として、「**橋をかける会**」の活動をたとえば52年度に例をとってみると、次のようである。

事業内容

月	テ　ー　マ	学　習・運動内容	時間	方　法
5	架橋一年の計画	年間プログラム作成	3	話し合い
6	架橋後の能登島はこうあるべき	産業、教育、観光面より考える	4	シンポジュウム 200名
7	七尾と能登島の共存はいかに	七尾市の青壮年と語る会	3	話し合い
8	能登島架橋早期実現	七鹿パレードと宣伝マッチのサービス	5	車パレード
10	未来の能登島町	広報紙発行と配布　1500部		
11	先進離島をたづねて	研修旅行（四国、中国の離島）	60	2泊3日
3	目で見る将来の能登島	架橋後の能登島のパネル完成	50	実　習

発足後、この会は町役場や期成同盟の援助を受け、青年団協議会、婦人会連合と連携して、活ばつな活動を展開してきた。広報紙「橋」を年2回発行するほか、ビラを配布したり、資料集を作成したり、陳情、見学、研修を行ったりした。

「橋」（第2号）から、住民の声の一例（野崎・小幡みさ子）を抜きだしてみよう。

「切実に橋をほしいと思ったことは数多いが、その中の一、二記してみよう。お金や何かが必要でも、土曜日までは絶対帰郷できず、困惑と家恋いしさで、小さな心を痛めた七尾高女入学当時は、下宿の窓から見える日出ヶ島（能登島の部落）の白い灯台を涙の目でみつめながら、「橋があったら」と幾度思い、つぶやいたことだろう。

生涯の夢を託した一人息子が、海の事故で四時間の人工呼吸と肉親の祈りも空しく、ついに蘇生しなかった悲しい出来事、橋があって救急車が来てくれたら、もしや助かったのかも！遠く過ぎたことだが、昨日のことのように思いだす。開発のための橋もさることながら、町民の命を守るために、一日も早くと強く望んでやまないのです。」

これほどの切実さはなくとも、「地方（ジカタ）」（冗談まじりには「大陸」）と呼ばれる七尾方面とのつながりを求める、住民の架橋に託す夢は長年にわたる強烈な願望であり、まさに「夢の大橋」と呼ぶにふさわしい。架橋を契機に住民の将来への夢は大きくふくらみつつあり、直接・間接のメリットの冷徹な計算よりも、多分に心理的な憧憬に近いものが感ぜられる。

架橋の実現を目前にした今、「橋をかける会」は「架橋後を考える会」に衣替えし、架橋によるメリット・デメリットを検討し、町の未来像をさぐることをねらいとしている。

(2)　架橋をめぐる住民意識

しかし一般住民の架橋への関心は、かならずしも全島的なものとはいえない。有識者たちは認識不足を指摘するが、日常的には現在のフェリーで一応の用が足り、むしろ架橋によるフェリーの減船が心配されている。七尾に親せきが多い（旧市内の約半分は島の出身者で、血縁者は三分の二におよぶという）ために、島民の七尾との関係は深く、互いに固い絆によって結ばれている。したがって和倉方面へ迂回する架橋は、かならずしも歓迎すべきものとはならないのである。血縁による七尾旧市内との固い連帯・親近感は、経済、教育、医療、娯楽などのつながりと相まって、容易に崩れるものではないといえよう。

「橋」（第1号）に、**婦人会による住民意識調査**の結果が掲載されている。関係する部分を参考までに記しておくことにしよう。

○これからこの点に「してもらいたい」、「改善してほしい」

1位…医者　2位…道路　3位…病院診療所

○子供さんをどこまで進学させたいですか
男　中学…1％　高校…50％
　　専門…12％　大学…37％
女　中学…1％　高校…61％
　　専門…11％　大学…27％
○一年間に出稼ぎに出た人がいますか
いる…31％（全体）
○どの方面ですか
県内…42％
県外…58％（県外のうち、関西方面…51％、関東方面…17％）
○架橋について婦人会の中で話がでますか
良くでる…25％　ときどきでる…48％　でない…27％
○橋がかかるとよいと思いますか
かかるとよい…79％　かからなくてもよい…2％　どちらでもよい…19％
○橋がかかるとお医者さんが来ると思いますか
くる…58％　こない…6％　わからない…36％
○橋は子供の教育にひつようだと思いますか
ぜったいひつよう…36％　ひつよう…45％　ひつようでない…3％　わからない…16％
○橋がかかると、七尾市や他の町へ働きに行きたいですか
ぜったい行きたい…18％　行きたい…44％　行きたくない…12％　わからない…26％
○橋がかかると、生活がよくなると思いますか
かならずよくなる…61％　よくならない…10％　わからない…29％

さて、今回のわれわれの住民意識調査のうち、**架橋にかんする設問**の応答結果をみることにしよう。

住民意識の対象者属性とのクロス集計の結果は、全般に性・年令よりも、地区による違いがわりあい鮮明に現れた。それゆえ、以下地区クロスの結果を中心にして概括してみたい。

まず、設問〔1〕において**能登島大橋への関心度**を問うているが、全体的に関心の深いことは当然としても、それにもかかわらず地区によってくっきりとした対照を示しているのが注目されるところである（**表II—13**）。すなわち、架橋位置に近い西部の関心度は高く、約6割が「非常に関心がある」と答えている。これに対して中部は「まあ関心がある」（37.3％）程度であり、さらに東部となると「関心がない」の比率がやや多くなっている。これは、県が大橋と（西部の通から中島町に渡る計画のある）農道橋とをつないでバイパス道路とする意図をもっている

表II—13　能登島大橋への関心度　（％）

〔1〕現在、能登島町と七尾市に橋（能登島大橋）をかける計画がありますが、あなたはこの「大橋」についてどのくらい関心がおありでしょうか。

	非常に関心がある	まあ関心がある	あまり関心がない	まったく関心がない	無　記　入	TOTAL
東	50.6	32.2	11.9	2.6	2.7	100.0
中	47.6	37.3	9.5	1.1	4.5	100.0
西	59.4	28.0	8.4	1.3	2.9	100.0

表II—14　大橋にかんする情報源（%）

〔2〕この「大橋」について、あなたはつぎのうちのどれから知ったり話をきいたりなさいましたか。

	新聞やテレビ・ラジオ	役場の広報	公民館の広報	青年団	婦人団	老人クラブ
東	59.1 −	46.7 +	30.2 +	14.1	7.7	0.5
中	63.3	40.6	25.2	17.1	6.4	0.3
西	70.2 +	41.6	24.9	16.5	4.7 −	1.6 +

	「橋をかける会」	家族やしんせきの人	近所の人	村の有力者	役場の人	その他
東	30.0	10.4	9.5	8.2	14.8	1.5 −
中	37.8 +	9.8	6.7 −	6.2	17.1	2.8
西	30.1	13.1	9.9	9.9	16.8	3.4

ために、交通にかんしては西部が脚光を浴びる事情もからんでいよう。

設問〔2〕の**大橋にかんする情報源**について（**表II—14**）は、新聞やテレビ・ラジオに注意しているのはやはり西部に多く（約7割）、東部では役場の広報（46.7%）や公民館の広報（約3割）に頼っている率がやや高い。青年団（15%内外）や婦人会（6%内外）から情報を得ている者は全体に少いが、これはこれらの団体が公民館や役場とタイアップして広報活動を行っているので、後者のイメージが強くなっていることにもよっていよう。「橋をかける会」も役場や社会教育団体との関係が深く、半ば公的性格をもっているが、その活ばつな活動を反映して、全体で3割の者が情報源としている。なかでも、中部地区ではその比率（37.8%）がやや高い。

家族や親せきの人、近所の人との間では、大橋のことが話題となることはあっても、情報源となることは当然少かろう。村の有力者についても同様であるが、これが役場の人となると、青年団並みの比率（16%内外）はあり、人的情報源としては、やはり公的ないし半公的機関の人物が有効情報源となっているようである。

住民の**大橋にたいする期待の内容**については、設問〔3〕で問いかけられている（**表II—15**）。ところが、大橋が「島の将来の発展にぜひとも必要」と考える者は全体で2割にも満たず、8割程度が否定的な回答をしているのは、まことに驚くべきことといわなくてはならない。しかも肯定的な答えが東・中部に多く、否定的な反応が西部に多いことは、受けとりようによっては、やや皮肉な結果ともいえよう。

架橋にともない、「島の道路工事など盛んになり、島に活気がでる」という考えにたいしては、賛意を表すのは15%弱で、7割程度の人たちはそうは考えていない。

「ともかくも離島でなくなる」とする者はさらに少く、この調査結果によるかぎり、島民の孤立感はそれほど強いものとは思われない。

問題の診療にかんしては、「急病などの治療がうけやすくなる」とする者は極度に少く、9割近くの者がそうは思わないと答えている。これらの反応は、「大橋」の性格を住民がどう受けとめているかを示すものであり、有料道路を住民がみずからの生活と直結させて感ずることは元来無理であり、大橋を生活道路としてではなく、観光道路ないしはバイパス道路としてしかとらえていない住民のクールな反応をみてとることができるように思われる。

表II—15　大橋にたいする期待の内容（%）

〔3〕では、あなたはこの「大橋」に、どのような期待をもっていらっしゃいますか。

1．島の将来の発展にぜひとも必要である。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	0.9	13.8	31.5	45.0	8.9	100.1
中	0.8	12.9	37.0	37.8	11.5	100.0
西	0.8	6.0	34.0	50.3	8.9	100.0

2．橋がかかれば、それにともなって島の道路工事などがさかんになり、島に活気がでる。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	1.5	15.3	39.2	31.2	12.8	100.0
中	1.4	14.8	42.9	26.9	14.0	100.0
西	1.0	11.5	43.5	29.1	14.9	100.0

3．ともかくも離島でなくなる。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	1.7	12.4	38.3	34.1	13.5	100.0
中	1.1	12.6	37.3	33.1	16.0	100.1
西	1.3	11.5	36.1	35.3	15.7	99.9

4．急病などの治療がうけやすくなる。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	0.3	2.2	17.4	70.7	9.4	100.0
中	0.3	1.7	21.6	68.3	8.1	100.0
西	0.5	2.9	22.0	66.0	8.6	100.0

5．観光客やつり客がふえる。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	0.3	11.6	41.6	33.7	12.8	100.0
中	1.7	17.6	44.0	22.7	14.0	100.0
西	2.1	12.8	44.5	25.1	15.4	99.9

6．島のくらしが文化的になる。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	4.1	33.9	28.8	20.8	12.4	100.0
中	4.2	35.6	31.9	12.9	15.4	100.0
西	4.5	28.8	31.7	18.6	16.5	100.1

7．七尾や金沢方面にいきやすくなる。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	1.2	14.3	31.5	41.9	11.1	100.0
中	1.4	9.2	35.0	42.0	12.3	99.9
西	0.8	5.5	33.2	46.9	13.6	100.0

それでは、「観光客やつり客がふえる」ということにかんしてどうかといえば、これも7割ほどが反対意見をもっている。賛意を示すのは中部にやや多く、東部は強い否定の方に傾いている。したがって観光漁業についても、あまり大きな期待は抱いていないことがわかる。

一方、「島のくらしが文化的になる」と受けとめている者は全体に多くなっており、約3割5分が、「まあそう思う」程度だが、肯定的な答えをしている。「文化的」ということの内容が問題だが、推察するに、都会的なくらしになってくるというような意味ではあるまいか。

「七尾や金沢方面にいきやすくなる」という交通面の意見にたいしても、賛意は少く、案外西部地区においてとくにそうである。東部の人たちに、「まあそう思う」が少し多いのと対照的である。

設問〔3〕の期待にたいして、設問〔4〕は**架橋後の不安**を問うている（**表II—16**）。

自動車の増大による交通事故にかんしては、全体にそれほど心配されていないが、中部の人たちがその心配をややしているのに対して、東部の人たちにはとりわけその心配の程度はあまり高くない。

自然環境の破壊についても、7割強の人たちが心配しておらず、とくに東部地区においてその傾向が強い。さすがに西部では、他の地区と較べて、自然破壊の不安がうっすらと感じられている気配である。

さらに、観光地につきものの風紀の乱れについては、西部地区にとくにその心配が強くあり（24.4%）、東部地区（15.7%）と好対照を示している。

島の住民が痛切に心配しているのは、架橋後、船便が悪くなりはしないかということと、若者の流出が促進されるのではないかということである。「フェリーの本数が減ったりして、日常生活がかえって不便になるのではないだろうか」にたいして、半数以上がそう思うと答え、とくに西部では、実に66.7%がその怖れを抱いており、しかも心配の程度が強い（24.6%）。それに較べると、東部では、その点にあまり不安を感じていないようにみえる。参考までに、現在の**カー・フェリー船の利用状況**を掲げておくことにする（**表II—17**）。

「若者が島を出ていってしまう傾向が強まるのではないだろうか」という怖れは、全体では約半数の人たちがもっている。離島なるがゆえにからくも留まっている跡とりが、地続きになることによって、かえって島を離れることになりはしないかと、多くの人びとが危惧している。そういう不安を強く感じているのは、とくに西部地区であるが、程度の差こそはあれ、他の地区でもその心配は根強くつきまとっているといえる。

以上を要するに、総じて架橋による期待よりは不安の方が先立っているように見受けられる。期待と不安とが交錯しているのが実際であろうが、「便利」になることによって都会的生活様式が流れこみ、かえって島の特質が失われ、日常生活の基盤が崩壊してしまうことを島の住民たちは何よりも怖れているといえそうである。

表II—16　架橋後の不安

〔4〕それでは、「大橋」がかかったあとの島の生活について何か不安や心配していることがおありでしょうか。

1．観光バスやマイカーがふえて、交通事故がふえるのではないだろうか。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	0.7	3.6	32.5	55.7	7.5	100.0
中	1.4	7.3	32.8	48.5	10.1	100.1
西	1.0	4.2	42.1	42.1	10.5	99.9

2．この豊かな自然や静かな環境が破壊されるのではないだろうか。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	1.4	10.2	32.4	47.0	9.0	100.0
中	2.2	12.0	33.3	42.0	9.8	99.9
西	1.8	14.1	37.2	36.1	10.7	99.9

3．観光客やマイカーの若者たちによって風紀が乱れるのではないだろうか。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	1.2	14.5	35.8	38.0	10.6	100.1
中	1.4	21.0	28.3	35.0	14.3	100.0
西	2.9	21.5	34.3	25.7	15.7	100.1

4．フェリーの本数が減ったりして、日常生活がかえって不便になるのではないだろうか。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	12.9	43.1	21.1	11.2	11.6	99.9
中	14.0	40.9	21.0	8.4	15.7	100.0
西	24.6	42.1	11.3	5.5	16.5	100.0

5．若者が島を出ていってしまう傾向が強まるのではないだろうか。

	とてもそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	無記入	TOTAL
東	11.1	50.4	16.9	9.4	12.3	100.1
中	13.2	47.3	16.5	9.0	14.0	100.0
西	16.2	48.7	11.8	5.8	17.5	100.0

表II—17　フェリーボート利用状況

年度	乗客(人)	取扱い貨物(t)			取扱い自動車(両)			
		発送	到着	計	特殊車	トラック	軽四・乗用車・ライトバン	バス他
49	379,693	2,334	765	3,099	2,006	20,230	42,105	361
50	373,956	2,284	754	3,038	1,459	19,352	44,405	260
51	363,083	2,238	749	2,987	1,688	19.842	44,536	189

資料：能登商船㈱

表II—18　不安への対処の仕方（%）

〔4〕S．Q．では、うえのような不安や心配について、現在のところどのように対処したらよいとお思いですか。

	そういうことは実際に問題がおこってから対策を考えていけばよいと思う	今から予想される問題についていろいろと考えていくべきである	いろいろと問題がおこるかもしれないが、ともかくも橋がかかることが重要である	わからない	無記入	TOTAL
東	5.3 +	55.9 +	25.0 −	4.9	8.9	100.0
中	3.1	53.5	31.4	5.3	6.7 −	100.0
西	3.7	45.0 −	34.8 +	4.2	12.3 +	100.0

表II—19　架橋による生活上の変化（%）

〔5〕ところで、「大橋」は、あなたの生活に何か影響や変化を与えるだろうとお思いでしょうか。それとも、別に何も影響や変化は与えないだろうとお思いでしょうか。

	仕事の面で、何か影響や変化があるだろうと思う	余暇のすごしかたに、何か影響や変化があるだろうと思う	現在の生活環境に、何か影響や変化があるだろうと思う	何も影響や変化はないだろうと思う	わからない	無記入	TOTAL
東	41.7	10.4	32.9	5.8	5.8	3.4	100.0
中	36.7 −	13.4 +	32.5	6.7	8.7 +	2.0	100.0
西	46.6 +	7.1 −	29.3	7.6	5.2	4.2	100.0

ところで、このような漠然とした不安にたいして、島民たちは**どのように対応**しようとしているのであろうか（**表II—18**）。不安を感じている者の半数強は、「今から予想される問題についていろいろと考えていくべきである」という意見をもっている。その意見はとくに東部に多く（55.9%）、西部に少い（45%）。西部に多い（34.8%）のは、「いろいろと問題がおこるかもしれないが、ともかくも橋がかかることが重要である」という意見で、逆に東部ではこの答えは少い（25%）。それぞれ立地上の利害関係が如実に反映されているといってよかろう。「そういうことは、実際に問題がおこってから対策を考えていけばよいと思う」という態度は、全体的に案外少かった。

架橋による生活上の変化をどの生活領域で予測しているか（設問〔5〕）についてみると（**表II—19**）、設問〔3〕〔4〕と当然重なるが、全体に仕事の面と生活環境の面で影響や変化があるだろうと予測している者が多い。仕事の面での影響を感じているのはとくに西部地区に多く、中部地区には比較的少い。中部で他の地区よりもやや多いのは、余暇のすごしかたにかかわる変化である。生活環境におよぼす影響については、地区による差異はほとんどない。また、何の変化もないとする者は、全体的に少い。

最後に、架橋問題と密接に関連する問題として、設問〔8〕における、**島の将来への展望**について（**表II—20**）若干みておくとしよう。特徴的なのは、中部地区では「将来は、島に工場などを誘致して、働くところをたくさんつくり、若い人たちが出ていかないようにして島を発

表II—20　島の将来への展望（%）

〔8〕能登島は、将来、どのような島になったらよいとお思いですか。

	将来は、島に誘致工場をたくさん出展させて、観光客を働きかけるなどして、にぎわいのある島ところつくりをこんいう発展をめざす	将来は、観光施設や民宿をたくさんつくり、観光地として発展していったらよい	農業や漁業を中心として、加工品などにも力を入れて発展していったらよい	「大橋」がかかれば、島というより七尾の一部となるので、七尾とともに発展していったらよい	現在のままでよいと思う	無記入	TOTAL
東	41.1	6.3	35.6^{+}	7.3^{-}	7.0	2.7	100.0
中	46.5^{+}	9.0	25.8^{-}	9.5	7.6	1.7	100.1
西	35.1^{-}	7.9	35.3	14.1^{+}	4.5^{-}	3.1	100.0

展させる」という意見が多く（46.5%）、西部ではこれは少い（35.1%）ことである。

西部に比較的多い（14.1%）のは、「大橋がかかれば、島というより七尾の一部となるので、七尾とともに発展していったらよい」で、東部ではこの意見は少い（7.3%）。そして東部に多い（35.6%）のは、「農業や漁業を中心として、加工品などにも力を入れて発展していったらよい」という意見であり、これは中部では少い（25.8%）。

立地条件と生活基盤のちがいが、将来への展望の相異を生みだしていることは明らかであり、これは地域振興策をめぐって各地区のイメージが微妙にくいちがっていることを示しているものである。これを単純に地区利害のちがいとして固定化するのではなく、利害調整を通じて、島全体の地域振興に向けて住民のエネルギーを集約することが肝要であろう。

なお、この点にかんしては、「将来は、観光施設や民宿をたくさんつくり、観光地として発展していったらよい」とする意見は、全体的に意外に少く、1割にも満たなかった。また、「現在のままでよいと思う」も同様に少かった。このことから、地域振興にかける住民の意欲は、潜在的にはかなり強いと判断してよいと思われる。

（八木　　正）

III　住民意識の諸類型と地域社会への展望

1　地域社会へのかかわり方と住民意識

(1)　離島における住民の構成と意識

IIIでは、能登島町の住民が自分たちの住んでいるところ、すなわち地域社会に対して、どのような評価や展望をもっているのだろうか。また、この地域社会の中で営まれている日常生活でどのような問題や悩みをもっているのだろうか。そして、これらはどのような住民によってどのような違いがあるのだろうかという点を検討することによって、地域社会のにない手である住民の意識面から、地域社会のかかえている様々な問題と将来への展望を考察する手がかりとしていきたいと思う。

まず、能登島町住民の構成上の特徴をみると、その人口構成と職業構成において、島の特徴が指摘できよう。すなわち、島の住民は、結婚などによって流入してきた少数の人を除いては、ほとんどが島で生まれ育った人々である。そして、十代の後半を中心に、20歳前後の若い世代が流出人口のにない手であり、従って過疎化の傾向が伺えるわけだが、現在のところ、家のあととりは島に残るか、あるいは島にもどるというかたちで戸数そのものに大きな減少はない。しかし、島の将来のことを考えると、この若い世代の動向は特に重要である。今回の調査では、すでに島を出ていった若い世代の人々は調査対象者から除外されているので、この動向を島に残っている青年層だけからとらえており、その点で一定の限界があるといえよう。

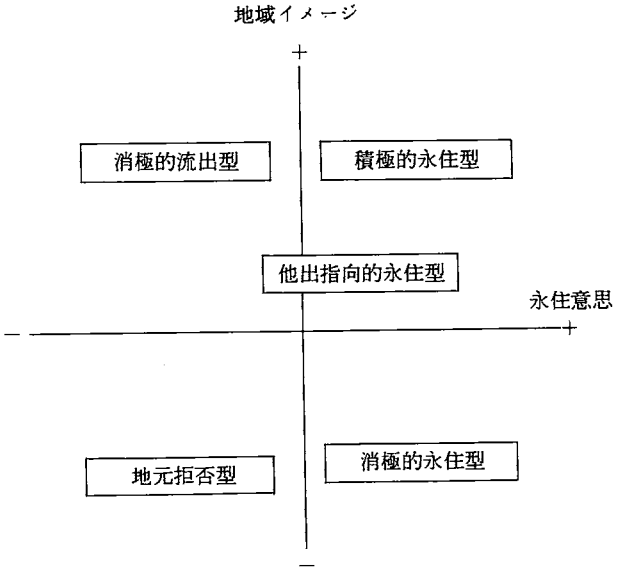
次に、職業についてみると、家で農業・漁業をやっているものがほとんどで、個人的には製造業やサービス業などに従事していても、家業である農・漁業を手伝っているのがふつうなので、職業的には同質的な住民構成であるといえよう。従って、都市のように職業の違い――生活構造・生活様式の違い――生活意識の違いという傾向が出てくる場合とは異なったとらえ方が必要である。それで、人口構成上の特徴とも考えあわせて、住民の地域社会へのかかわり方を2つの側面からとらえた永住指向の諸類型を考えることにより、どの類型の人達がどのような日常生活での悩み・問題や、地域社会への展望をもっているのかを動態的にとらえていきたいと思う。

(2)　永住指向の諸類型とその属性

能登島町の住民は、これからもずっとここに住んでいたいと思っているかどうか――永住意思の有無と、その理由として積極的にここでくらしたいのか否か、すなわち、地域社会へのかかわり方や評価が肯定的であり愛着をもっているか否か――これを広義の地域イメージとここではよぶ――によって、次のような5つの類型ができる。(図III－1)

① 積極的永住型（一生ここに住んでいたい）
② 消極的永住型（ここでくらしたくないが仕方がないのでずっと住むことになるだろう。）
③ 他出指向的永住型（外に出ていっても、最後にはここにもどってきたい）
④ 消極的流出型（ここでくらしたいが、外にいかざるをえない。結局、ここに住まなくなるだろう）
⑤ 地元拒否型（ここでくらしたくない。よそでくらしたいと思っている）

能登島町で一番多いのは「積極的永住型」で65パーセントである。次が「消極的永住型」で



図Ⅲ—1　永住指向の諸類型

表Ⅲ－2　性・年令×永住指向の諸類型

(注)・(　)内は未婚者の実数，性・年令のＮＡは省略
・表の右上**はX²検定の危険率１％，*は５％を示す

	(計)	永住型			流出型		**
		積極的永住型	消極的永住型	他出指向的永住型	消極的永住型	地元拒否型	DKNA
	1243	64.8%	16.4	8.9	2.0	2.3	5.7
男	658 (87)	65.3	16.0	9.9	2.4	1.7	4.7
20 ～ 24	63 (54)	38.1^{-} (19)	23.8^{+} (13)	20.6^{+} (12)	9.5^{+} (6)	4.8^{+} (2)	3.2 (2)
25 ～ 29	79 (26)	53.2^{-} (15)	22.8^{+} (5)	19.0^{+} (5)	1.3	1.3	2.5
30 ～ 34	80 (4)	67.5 (3)	15.0 (1)	12.5 (0)	2.5	2.5	0.0^{-}
35 ～ 39	64 (0)	62.5	21.9	4.7	1.6	0.0	9.4^{+}
40 ～ 44	93 (3)	65.6 (2)	19.3 (1)	7.5	3.2	2.1	2.1
45 ～ 49	97 (0)	77.3^{+}	9.3^{-}	7.2	0.0^{-}	2.1	4.1
50 代	182	73.6^{+}	10.4^{-}	5.5	1.6	0.5	8.2^{+}
女	585 (38)	64.4	18.3	7.4	1.4	2.9	5.6
20 ～ 24	64 (28)	39.1^{-} (5)	18.7 (4)	20.3^{+} (7)	7.8^{+} (5)	7.8^{+} (5)	6.2 (2)
25 ～ 29	79 (3)	57.0 (1)	22.8	8.9	0.0 (1)	10.1^{+} (1)	1.3^{-}
30 ～ 34	80 (2)	61.2	25.0^{+} (1)	5.0	2.5	1.2 (1)	5.0
35 ～ 39	60 (1)	60.0 (1)	25.0^{+}	6.7	0.0	3.3	5.0
40 ～ 44	89 (2)	68.5^{-}	19.1 (1)	9.0 (1)	1.1	1.1	1.1^{-}
45 ～ 49	94 (0)	73.4^{+}	11.7^{-}	4.2	0.0	0.0^{-}	10.6^{+}
50 代	119 (2)	77.3^{+} (1)	11.7^{-}	2.5^{-} (1)	0.0	0.0^{-}	8.4

16パーセント(注1)である。この2つをあわせると、これからもずっとここに住んでいる人は81パーセントの高い割合をしめすことになるが、前者と後者とでは地域社会に対する肯定的イメージと否定的イメージという対照的な傾向を示している。この意味では消極的永住型は、同じ永住層を構成してはいても、「ここでくらしたくないが仕方がないので」という意識をもっている点で、この類型のにない手の属性や意識の検討、および今後この類型が増加していくのか否かの検討は重要な課題であろう。

「他出指向的永住型」（9パーセント）は、仕事などで外にいってもそこは仮のすまいで、永住の地としてはこの島がよいと思っている人々である。この意味ではふるさととしての島に肯定的なイメージをもっている層である。

「消極的流出型」と「地元拒否型」は、ともに2パーセントであり、少数派である。どちらも非永住指向層であるが、地域社会へのイメージ・評価が対照的である。前者は、「ここでくらしたいが外にいかざるをえない」という理由なので、現時点でもし外にいかざるをえない点が解決できるなら「積極的永住型」になるだろうが、前者は、「ここでくらしたくない。よそでくらしたいと思っている」というはっきりした否定的態度をとっている。「消極的永住型」とあわせると島に残っている住民のうち約2割が、「ここでくらしたくない」という否定的な地域イメージをもっているといえよう。

では、この5つの類型のにない手はどのような人々であろうか。まず性別・年令別との関係をみると（表Ⅲ―2）次のことがわかる、

① 全体として年令が高い層程、「積極的永住型」である。すなわち、20代前半はきわだって低く、約3人に1人の割合であるが、20代後半は2人に1人、30代および40代前半は5人に3人、40代後半以降は4人のうち3人までがこの類型である。そして、それぞれの年代で男女差のあまりないことが特徴である。

② 「消極的永住型」は、その主要なにない手が男女では違っている。男性の場合は20代、女性の場合は30代が、他と比べて有意に高く約4人に1人の割合である。40代後半以降は男女とも約10人に1人の割合で有意に低い。

③ 「他出指向的永住型」は、男性の20代と女性の20代前半が一番多く約5人に1人の割合である。とくに女性の場合、20代後半以降は低くなっており、「外に出ていく」ことのできる年令がこのような男女差となってあらわれているのではないだろうか。

④ 「消極的流出型」は、男女とも20代前半のみがそのにない手である。

⑤ 「地元拒否型」は、女性の20代のみがそのにない手であり、とくに20代後半は約1割をしめる。男性より、若い女性にとって「ここでくらしたくない」という否定的態度が強いといえよう。

次に、まだ結婚していない人々ではどの類型が多いかをみると、ここでは男女差がはっきりしている。未婚者の男女比は、7対3で圧倒的に男性の方が多く、男性の未婚者のうち45パーセントは「積極的永住型」であり、「消極的永住型」は23パーセント、「他出指向的永住型」は20パーセントである。従って90パーセント以上がここを永住の地と考えている。しかし、「ここでくらしたくない」という否定的なイメージをもっているものは、「消極的永住型」と「地元拒否型」をあわせると25パーセントになる。

女性の場合は未婚者が少数（女性全体の6.5パーセント）で、20代前半に集中している。そして5つの類型にほぼ同じくらいの人数で分散しているのが特徴である。20代前半の「地元拒否型」は全員が未婚者であるが、20代後半の場合は、ほとんどが既婚者である点に注目した

い。若い母親・主婦が「ここでくらしたくない。よそでくらしたいと思っている」という理由はなんであろうか。そして、彼女らの夫には、この「地元拒否型」が見当らないという両者の相違は何によるのだろうか。この調査から、直接にはわからないが、興味深い問題であると思う。これらの問題への手がかりでもあり、また、否定的な地域イメージの具体的な面をあらわすものとして、次に能登島町住民の生活観と生活上の悩みの所在を探っていきたい。

2　住民の生活観と生活上の諸問題

(1)　住民の生活観

能登島町の住民は、どんな生活を送りたいと希望しているのだろうか。5つのタイプをあげそのうちひとつだけ選択してもらった結果の多い順から示すと次のようになる。

① 「家庭指向型」(なごやかな平和な家庭でくらす生活)——34パーセント
② 「収入指向型」(収入が多くて、ゆたかな生活)——30パーセント
③ 「価値指向型」(自分のやりがいのある仕事や趣味にうちこむ生活)——22パーセント
④ 「のんびり指向型」(その日その日をのんびりくらす生活)——7パーセント
⑤ 「社会的献身指向型」(世の中のためになることをする生活)——1パーセント

このように①と②が約3分の1ずつで多く、③が次につづくが、④は、我々の予想をはるかに下回って少なく、⑤はきわめて少ない。

では、永住指向の諸類型とはどのような関係になるだろうか。生活観と永住指向の諸類型は、x^2 検定をすると99パーセントの信頼性をもって相関関係があるといえる、表Ⅲ—3は、このクロス表であるが、ここから次のことが指摘できる。

① 「積極的永住型」では「家庭指向型」(36パーセント)が一番多く、次が「収入指向型」(33パーセント)で、いずれも他と比べて有意に高い。逆に、「価値指向」(20パーセント)は有意に低い。
② 「他出指向的永住型」では、この「価値指向」(34パーセント)が一番多く、有意に高いのが特徴である。やりがいのある仕事や趣味のうちこむ生活を送るためには島の外へいきたい、又はいかざるを得ないということであろうか。彼らが永住の意思があるとしてもそれは、島がふるさととして、彼らの拠所であるという意味であるならば、生産活動のにない手としては、機会さえあれば流出していく傾向があるといえよう。但し、この「他出指向的永住型」でも、「家庭指向型」(31パーセント)は多く、家庭生活を大事にする傾向も伺える。

図Ⅲ－3　永住指向×生活観

	計	家庭指向	収入指向	価値指向	のんびり指向	社会的献身指向	DKNA**
	1332	34.1	30.2	21.5	6.5	1.2	6.5
積極的永住型	863	36.1+	32.8+	20.0−	6.1	1.3	
消極的永住型	218	33.9	28.4	26.6+	6.9	0.4	
他出指向的永住型	118	30.5	25.4	33.9+	5.9	0.0	
消極的流出型	27	37.0	18.5	14.8	22.2+	3.7	
地元拒否型	30	33.3	33.3	13.3	10.0	3.3	
DK・NA	76						

表Ⅲ－4　年令×生活観

	計	家庭指向	収入指向	価値指向	のんびり指向	社会的献身指向	DKNA**
	1243	34.1	30.2	21.5	6.5	1.2	6.5
男	658	29.6	32.5	23.1	7.1	1.2	4.9
20 ～ 24	63	31.7	23.8	30.1	9.5	1.6	
25 ～ 29	79	35.4	30.4	26.6	5.1	1.3	
30 ～ 34	80	13.7^{-}	38.7	35.0^{+}	6.2	0.0	
35 ～ 39	64	21.9	29.7	29.7	4.7	4.7^{+}	
40 ～ 44	93	34.4	31.2	22.6	7.5	1.1	
45 ～ 49	97	27.8	37.1	20.6	8.2	1.0	
50 代	182	34.6^{+}	33.0	13.2^{-}	7.7	0.5	*
女	585	39.6	28.5	19.4	6.0	0.7	5.6
20 ～ 24	64	39.1	26.6	26.6	3.1	1.6	
25 ～ 29	79	46.8	29.1	15.2	5.1	1.3	
30 ～ 34	80	33.7	26.2	33.7^{+}	5.0	0.0	
35 ～ 39	60	40.0	25.0	23.3	5.0	0.0	
40 ～ 44	89	49.4^{+}	23.6	16.8	5.6	1.1	
45 ～ 49	94	29.8^{-}	40.4^{+}	13.8	4.2	1.1	
50 代	119	39.5	26.9	13.4^{-}	10.9^{+}	0.0	

③　「消極的永住型」は、「家庭指向型」(34 パーセント) が一番多く、次が「収入指向型」(28 パーセント) であり、この傾向は、「積極的永住型」と同様である。しかし、この類型と異なる点は、「価値指向型」(27 パーセント) が有意に高いことである。従って、「価値指向型」は、「他出指向的永住型」と「消極的永住型」がその主要なにない手といえる。

④　「消極的流出型」および「地元拒否型」は人数が少ないが、その中での特徴をあげると「家庭指向型」がやはり一番多い。そして、前者では、「のんびり指向型」が、他の類型と比べて有意に高いのが特徴である。消極的流出型は男女とも 20 代前半の未婚の人がそのにない手であり、このような若い独身者で、「消極的流出型」を選択するものは「その日その日をのんびりとくらす」という生活の仕方を望んでいることがわかる。従って、ここから類推できることは、彼らが「ここでくらしたいが」といっている背景には、ここが、のんびりと生活できるよいところだという能登島への評価があるということである。これと対照的に「地元拒否型」では、「収入指向型」が「家庭指向型」とならんで一番多いのが特徴である。「ここでくらしたくない、よそでくらしたい」という理由のひとつとして、収入が多くてゆたかな生活を営むにはここは不適当という考えがあるのではないだろうか。

この生活観は、同じ人でも年齢によって異なってくる場合もあり、また性別によっても異なるだろうと思われるので、その点を簡単にみていきたい。表Ⅲ－4 は年令と生活観とのクロス集計表である。

まず、男性の場合、30 代前半では「価値指向型」が 35 パーセントで有意に高く、逆に「家庭指向型」が 14 パーセントで有意に低いのが目立っている。そして、これと対照的な傾向を示す

のが50代である。この相違は両者のライフ・ステージの違いを示すものであろうか。すなわち、50代は、子供も結婚し、孫も生まれるという家族構成の中で、何よりも「なごやかな平和な家庭でくらす生活」が望まれるのではないだろうか。なお、「家庭指向型」は20代後半も50代と同様に多いのが目立っている。新しい家庭生活をスタートさせ、自分の子供を育てるという中で、家庭が重視されるのだろう。そして、この時期をすぎ30代前半になると前述のように「価値指向型」が多くなり、いわゆる仕事盛りの年令となる。

女性の場合は、男性と比べて、全体として「家庭指向型」が多い。そのピークは、20代後半と40代前半である。前者は子育ての時期、後者は、成人前後の子供のいる場合が多い。そして、30代前半は、男性と同様に「価値指向型」が多いのが目立っている。但し、男性の場合と違って、「家庭指向型」も多く、この二つのタイプにわかれることが特徴である。

(2) 生活上の諸問題――「悩み」のパターンと所在――

では、次に能登島町の住民は日常生活においてどのような問題をかかえ、悩んでいるのだろうかについて調べてみたい。このため、個人、家族、地域社会、社会の4領域における13側面について16の問題、悩みをあげ、そのようなことに悩んでいるか否かを尋ねた。なお、個人や家族の領域でも、島の生活と関連の強いと思われるもののみをとりあげている。また、それぞれの問題について、とくに悩んでいる層として性別・年令別による特徴がはっきり出ているもの（有意差のあるもの）はそれを付記した。（表Ⅲ―5）

全体的にみると過半数以上の住民から「そう思う」と選択された項目は、①「物価が高い」（80パーセント）を筆頭に、②「世の中の景気がわるい」（75パーセント）、③「収入がすくなすぎる）（72パーセント）と上位三位はいずれも経済的側面についての問題である。そして、これはとくに働き盛りの男性には強く意識されており、物価と景気は30代前半に、収入は40代前半のほとんどの人が問題にしている。④「道徳がすたれている」（60パーセント）も問題にされているが、このように、社会の領域と経済的側面がいずれも住民の過半数以上の人の悩みの対象となっていることがわかる。これに続いて地域社会の領域の問題があがっている。すなわち⑤「町がとおくて生活が不便」（56パーセント）、⑥「農作物や魚などの値段が低い」（52パーセント）、⑦「音楽会などの文化的なことにふれる機会がすくない」（51パーセント）、さらに⑧「人に気を使わなければならない」（48パーセント）と、地域社会における地理的、産業、人間関係、文化の4側面のすべてにわたって約半分以上の人が問題にしていることがわかる。また前述の③「収入がすくなすぎる」は、個人の領域に入っているが島の生活における収入ということでもあるので、この意味では、地域社会の産業構造のもうひとつの側面をあらわしているといえよう。

個人や家族の領域は、社会や地域社会の領域の問題と比べると全体的に低い割合であるが、これは個人や家族がその問題に関係なかったり直面していない場合は選択されないからであるがこの領域は、当人や家族にとっては深刻な問題であろう。この中で、「毎日の生活にはりがない」（28パーセント）は、20代の人に多く、男性の20代前半では約半数の人がそう思っており、また男女とも20代後半は約40パーセントが選択している。「出稼ぎ仕事のつごうで家族みんながいっしょに生活できない」は男性の50代に多いのは、生活観における「家庭指向型」ともあわせて、この世代の家族や家庭生活への重視が伺える。なお、「家のあととりのため就転や結婚などが自分の思いどおりにいかない」は、世代差が出ており、男女とも40代後半が多く20代後半では「そう思わない」と回答するものが多く（65パーセント）、時代のうつりかわりが感じられる。今の若い世代では、40代後半の世代と比べると、家のあととりということによる制約

表Ⅲ－5　生活上の「悩み」の分類と単純集計

領域	側面	項目	%	とくに多い性・年令層（%）
個人	経済的	収入がすくなすぎる	72	男40前(83)
	精神的	毎日の生活にはりがない	28	男20前(49) 男20後(38)，女20後(43)
	時間的	自由になる時間がない	33	女20　(47) 男30後(42)
家族	家族関係（精神的）	家庭の中がうまくいかない	14**	女20前(22)
	家族関係（物理的）	出稼ぎや仕事のつごうで家族みんながいっしょに生活できない	16	男50（22）
	家屋の構造	住居に自分だけのへやがない	14	男30（21）
	家意識	家のあととりのため，就職や結婚などが自分の思いどおりにいかない	30	男40後(42)
地域社会	地理的	町がとおくて生活が不便	56	
	人間関係	人に気をつかわなければならない	48	女20後(67) 男20後(61)，男40前(57)
		異性の友だちがいない	17	男20前(29) 女20前・30後(25)
	文化	音楽会などの文化的なことにふれる機会がすくない	51	男20前(65)，男30前(63) 女20前(67)，女20後(71)
		スポーツなどをする施設がない	31	女20前(53) 男40前(43)
	産業	農作物や魚などの値段が低い	52	男50（60）
社会	経済的	物価が高い	80	女20後(92) 男30前(85)
		世の中の景気がわるい	75	男30前(86)
	文化	道徳がすたれている	60	

（注）・パーセントの数字は「そう思う」と回答したものの割合である
・とくに多い年令層はパーセントの差の検定の結果，有意差のあるものを示した。
なお男40前とは男性40代の前半の意味である。

はそれ程厳しくないのであろうか。むしろ、親の方が、子供に気を使っているのかも知れない。

(3)　生活上の悩みからみた地域イメージ――永住指向の諸類型との関係――

次に、この16項目のうち永住指向と相関関係のある項目をえらんで、類型間の相違を検討したい。表Ⅲ―6は、「そう思う」と回答したものの割合をしめしたものである。まず、目につくことは「消極的永住型」は、「異性の友だちがいない」を除いては、すべての項目において悩んでいるものの割合が多いということである。「ここでくらしたくないが、仕方がないのでずっと住むことになるだろう」というその意識の中に、このような諸々の問題に悩み、不満をいだいていることが伺えよう。この意味では、彼らは永住層ではあるが、ここでのくらし、生活のあり方、地域社会の環境に一番悩みを感じている。まさに否定的な地域イメージをもっているわけであるが、現実には仕方がないという認識のもとにずっと住み続けるということがさらに悩みを深めているのではないだろうか。そして、「仕方がない」というその理由のひとつとして、

表Ⅲ－6　永住指向の諸類型×生活上の悩み

**

生活上の悩み ＼ 永住指向の諸類型	(計)	個人		家族	地域社会				
		収入がすくなすぎる	毎日の生活にはりがない	家のあととりのため就職や結婚などが自分の思いどおりにいかない	町がとおくて生活が不便	人に気をつかわなければいけない	音楽会などの文化的なことにふれる機会がすくない	スポーツなどをする施設がない	異性の友だちがいない
	1332	72.4	27.9	29.9	56.2	48.1	50.6	31.1	17.0
積極的永住型	863	72.5	22.7^{-}	27.3^{-}	53.8^{-}	46.7	49.6	27.2	15.7^{-}
消極的永住型	218	85.3^{+}	45.4^{+}	39.0^{+}	70.6^{+}	61.5^{+}	58.7^{+}	43.6^{+}	20.2
他出指向的永住型	118	66.9	37.3^{+}	39.0^{+}	61.9	51.7	59.3^{+}	42.4^{+}	22.0
消極的流出型	27	85.2	37.0	29.6	66.7	48.1	55.5	44.4	25.9
地元拒否型	30	80.0	46.7^{+}	43.3	76.7^{+}	50.0	63.3	46.7	30.0^{+}
ＤＫ・ＮＡ	76								

「家のあととり」であるということが伺える。この「家のあととりのため就職や結婚などが自分の思いどおりにいかない」は、「積極的永住型」では27パーセント、「消極的永住型」と「他出指向永住型」では39パーセントで両者には有意差がある。後者の2類型の方が家の重みや束縛を、そしてその家の存立基盤である地域社会のあり方や現状に不満を感じているとみることができよう。「消極的永住型」における典型的な悩みを記すとそこには次のような否定的な地域社会への評価、イメージがうかんでくる。すなわち、何よりもまず「収入がすくなすぎる」し「町がとおくて生活が不便であり、人に気を使ってくらさなければならないし、文化的な環境にも恵まれず、毎日の生活にはりがない」。

これに対して、「積極的永住型」は、「消極的永住型」と対照的な傾向を示している。とくに、「町がとおくて生活が不便」と「毎日の生活にはりがない」は、有意に低い。島であるということからくる生活上のハンデイキヤップも、他の類型と比べるとそれ程強く意識されていないし、また、彼らの生活そのものが島の中で比較的充足されるくらし方であるともいえよう。そして、何よりも注目されることは、毎日の生活にはりをもってくらしている人が多いことである。島のような閉鎖的なところで営まれる生活は、かなりストレートにその島＝地域社会への評価・イメージに結びつだろうと思われる。この点については、次の節でさらに検討していきたい。

「他出指向的永住型」は、「積極的永住型」と「消極的永住型」のほぼ中間的な傾向を示しているが「毎日の生活にはりがない」および「家のあととりのため就転や結婚などが自分の思いどおりにいかない」は「積極的永住型」と同様有意に高い。また、音楽会などの文化的な環境に恵まれないことに対する不満も多い。なお、「消極的流出型」と「地元拒否型」は実数が少数のため比較には注意を要するが、「地元拒否型」は、ほとんどの項目において悩んでいる人の割合が一番高く、もっとも否定的な地域イメージをもっている。なお、この類型は、女性の20代前半の未婚者のほとんどが「異性の友だちがいない」という悩ををもっている。

3　地域社会への評価と要望

(1)　「住みよさ」と永住指向

能登島町の住民は、総合的にみてここを住みよいところだと感じているのだろうか。それと

も住みにくいところだと思っているのだろうか。また住みよくするためにはどのような点の改善や充実が望まれているのだろうかということを永住指向との関係を中心にみていきたい。すでに、前節の生活上の悩みの中で地域社会に関する項目はいずれも高率をしめていたが、このような個々の点において不満や悩みがあるにもかかわらず、総合的にみると

肯定的 { たいへん住みやすい……14パーセント
まあ住みやすい……47パーセント
どちらともいえない……20パーセント
否定的 { 住みよいとはいえない……16パーセント
たいへん住みにくい……2パーセント

になり、「住みやすい」と肯定的評価をしている人は60パーセントをこしており、「住みにくい」と否定的評価をしている人は20パーセントを下回っている。

では、永住指向との関係はどうであろうか。両者の間には高い相関関係（x^2 検定で危険率1％）があり、表Ⅲ－7からわかるように、「積極的永住型」と「消極的永住型」では非常に対照的な傾向を示している。すなわち、前者では、「住みよい」という肯定的評価をしているものと「住みにくい」という否定的評価をしているものとの割合が73パーセント対11パーセントで圧倒的に肯定的評価をするものが多く、しかも「たいへん住みよい」というものは20パーセント近くいるのに対し、後者では、26パーセント対40パーセントで否定的評価をするものが多く、しかも「たいへん住みよい」と回答したものは皆無である。また、この「消極的永住型」では、「どちらともいえない」が33パーセントもいるのが特徴である。「他出指向的永住型」は「積極的永住型」と「消極的永住型」の中間的な傾向を示しているが、肯定的評価をするものが過半数以上おり、否定的評価は、「積極的永住型」の次に低いので積極的永住型に近いといえる。従って、永住層のうち、「消極的永住型」のみが、「住みよいとはいえない」という否定的評価が強いといえよう。

なお、「消極的流出型」は、どちらかといえば「他出指向的永住型に」にパターンが似ているが、否定的評価がやや多い。また、「地元拒否型」は、数が少くないので正確な比較はむずかし

表Ⅲ－7　永住指向の諸類型×住みよさ

住みよさ／永住指向	(計)	肯定的評価			否定的評価**		
		たいへん住みよい	まあ住みよい	どちらともいえない	住みよいとはいえない	たいへん住みにくい	DK NA
	1332	13.8	46.8	19.8	15.5	1.6	2.5
積極的永住型	863	18.6^{+}	54.1^{+}	14.9^{-}	10.0^{-}	0.6^{-}	
消極的永住型	218	0.0^{-}	25.7^{-}	32.6^{+}	36.7^{+}	2.7	
他出指向的永住型	118	4.2^{-}	48.3	29.7^{+}	14.4	2.5	
消極的流出型	27	11.1	33.3	25.9	25.9	3.7	
地元拒否型	30	0.0^{-}	30.0^{-}	26.7	26.7^{+}	16.7^{+}	
DK・NA	76						

い点があるが、5つの類型の中でもっとも否定的評価が強い、すなわち、「たいへん住みよい」は皆無であるのに対して、「たいへん住みにくい」は17パーセントで有意に高い。

参考までに性別・年令別の特徴をみると、「たいへん住みよい」は女性の50代が19パーセントで一番多く、これとは逆に「住みよいとはいえない」は男性の20代前半が27パーセントで一番多い。また「どちらともいえない」とするものは女性の20代で3人に1人の割合となり同世代の男性よりもずっと多い点が特徴である。全体的には、男女とも年令が高くなる程、肯定的評価をする人が多くなる傾向がある程度伺えるが、この中で40代前半がその前後の年令層と比べて目立って少なく、とくに男性の場合この点が顕著である。

(2) 生活環境における要望

能登島町がもっと住みやすくなるためには、どんな点が充実されればよいと住民は思っているのだろうか。ここではフイジカルな面に限定して次の9つの点をあげ、その中から3つまでえらんでもらった。多い順からあげると、①交通機関・道路の整備（76パーセント）、②医療施設の整備（72パーセント）、③下水道やゴミ処理（43パーセント）、④商店・スーパーマーケット（29パーセント）、⑤娯楽・スポーツ施設（11パーセント）、⑥上水道や都市ガス（8パーセント）、⑦公民館・図書館の充実（4パーセント）、⑧電話や郵便（4パーセント）、⑨保育施設（3パーセント）である。このうち①と②は③以下を大きく引離しており住民の要望の強さを感じることができよう。「交通機関・道路」と「医療施設」は離島の問題を端的に示しており、また両者は相互に関連のある問題でもある。とくに医療施設は人命にかかわることである。島の場合は診療所があるものの専任医師などの不足もあって、「ちょっとした病気の治療」も46パーセントは「おもに七尾までかける」といっている。さらに、「重い病気やケガの治療」は実に82パーセントが「おもに七尾までかける」わけで、金沢方面へいくものも5パーセント程お

表Ⅲ－8　住みよさ×生活環境への要望

要望 / 住みよさ		㋐	㋑	㋒	㋓	㋔	㋕	㋖	㋗	㋘
	1332	75.6	7.6	3.9	43.1	72.8	11.1	2.6	3.8	28.7
たいへん住みよい	184	73.3	14.1+	8.7+	34.8	64.7	7.0	2.7	3.3	20.1
まあ住みよい	624	75.5	7.3	2.2	45.5+	76.3	11.4	2.4	4.0	27.1
どちらともいえない	264	76.1	5.3	2.6	44.0+	75.3	11.3	3.4	3.8	33.7
住みよいとはいえない	206	85.9+	6.7	3.9	36.4	74.7	13.1	1.4	3.4	35.0
たいへん住みにくい	21	66.7	9.6	0.0	33.3	61.9	23.8+	9.5+	9.5+	47.6+
DK・NA	33									

（注）・複数回答である
・要望の欄の記号は下記の通りである
㋐交通機関・道路の整備
㋑上水道や都市ガス
㋒電話や郵便
㋓下水道やゴミ処理
㋔医療施設の整備
㋕娯楽・スポーツ施設
㋖保育施設
㋗公民館・図書館の充実
㋘商店・スーパーマーケット

り、重い病気やケガをしたことのある人のほとんどが島外で治療を受けている。この場合、現在では1日5本のフェリーボートしか島外（七尾）へいく手段がなく、緊急の場合はヘリコプターということになる。では、この医療施設の充実のひとつの手段である交通機関・道路の充実という意味では「大橋」は住民にとってどのくらい期待されているのだろうか。アンケート調査の結果では、「大橋」がかかると「急病などの治療がうけやすくなる」と回答しているものはごく少数で2パーセント余りである。そして、逆に、そうは思わないと回答しているものは約90パーセントにもなり、その中でとくに、「まったくそう思わない」という人は70パーセント近くもいることが注目される。少くとも島内で「ちょっとした病気の治療」が安心して受けることのできる医療施設の整備が望まれる。

次に多く望まれているのが地域の衛生環境の問題である「下水道やゴミ処理」であり、また、消費生活の向上を望む「商店・スーパーマーケット」の充実も30パーセント近くいる。

では、前述の「住みよさ」との関係はどうであろうか。表III—8から次のようなことがわかる。「交通機関・通路の整備」は、「住みよいとはいえない」が85パーセントで有意に高く、特に強く要望されていることが注目される。「医療施設の整備」では、「たいへん住みよい」と「たいへん住みにくい」のみが60パーセント台で他の75パーセント台と比べるとやや低い。この「たいへん住みやすい」という人々は、「上水道や都市ガス」と「電話や郵便」が有意に高く、家事や情報伝達における利便性を望む傾向が伺えよう。これに対して、少数なので正確には比較ができないが、「たいへん住みにくい」では、「商店・スーパーマーケット」が約半数近くおり、消費生活における利便性を望んでいることがわかる。また、「下水道やゴミ処理」は、「まあ住みよい」と「どちらともいえない」が45パーセント前後で有意に高く、この人々にとってふだんの生活上の衛生環境の充実が強く意識されていることがわかる。

4　住民の地域生活への態度と島の将来像

(1)　地域生活のあり方

能登島町の住民は地域生活のあり方についてどのように考えているのだろうか。そして、前述のようなさまざまな要望を含む地域社会の諸問題に対してどのような解決の仕方を望んでいるのだろうか。また、将来どのような島になったらよいと考えているのだろうか。これらの三点について以下において検討していきたい。

まず、地域生活のあり方について次の5つの考え方からひとつえらんでもらった。

① この土地にはこの土地の生活やしきたりがあるのだから、できるだけ従って、人びとの和を大切にしたい。（伝統型—協調）

② 社会生活をしていく以上は場合によっては自分を犠牲にして社会や他人のためにつくす心がまえが常に必要である。（伝統型—犠牲）

③ 今はこの土地で生活しているが、あまり愛着や関心はない。地域のことは熱心な人にまかせておけばよい。（無関心型）

④ 生活上の不満や要求はできるだけ行政（役所）に反映させていくのが住民の権利である。（権利型）

⑤ 地域社会は自分の生活上の一つのよりどころであるから、住民は進んで協力し合い、住みよくするよう心がける。（自主協調型）

これと同じような調査が大都市近郊や地方都市ですでにされているので、その結果と比較しながらみていきたい。(注2) 但し、②は能登島町の調査のみで使用されているので、正確な比較は

表Ⅲ－9　地域別の地域生活のあり方

	地域生活のあり方／地域	調査対象者数	伝統型 協調	伝統型 犠牲	無関心型	権利型	自主協調型	DK・NA
島	能登島町(S53)	1332	28.0	7.0	3.0	11.0	46.0	4.0
			(35.0)					
大都市近郊	八王子(S45)	1032	19.0	／	6.0	24.0	49.0	2.0
	所沢(S48)	816	20.0	／	5.0	21.0	52.0	2.0
地方都市	金沢(S47)	484	35.0	／	7.0	11.0	46.0	1.0

表Ⅲ－10　永住指向の諸類型×地域生活のあり方

地域生活のあり方／永住指向	計	伝統型 協調	伝統型 犠牲	無関心型	権利型	自主協調型	DK・NA**
	1332	28.1	7.0	3.4	10.5	46.3	4.4
積極的永住型	863	30.6	8.0	2.0⁻	10.3	48.6	4.0
消極的永住型	218	22.9	5.5	5.5	14.7	52.3	2.3
他出指向的永住型	118	33.1	6.0	4.2	12.7	44.9	1.7
消極的流出型	27	14.8	11.1	11.1⁺	7.4	51.9	7.4
地元拒否型	30	20.0	3.3	20.0⁺	10.0	43.3	3.3
DK・NA	76						

できないが、表Ⅲ—9からわかるように、北陸の中心都市金沢とよく似た傾向をもっている。すなわち、「自主協調型」は46パーセントで一番多く、次が「伝統型—協調」で28パーセントである。「伝統型—犠牲」は①③④⑤の中では一番①に近いので集計上いっしょにすると、「伝統型—協調」は35パーセントとなる。この「自主協調型」が約半数を占め一番多く、次が「伝統型—協調」であるというパターンはどの地域でも共通にみられることがわかる。地域差がでるのは、「伝統型—協調」と「「権利型」である。前者は大都市近郊では低く、後者は地方都市や島で低く対照的な傾向を示す。しかしながら、農業を中心とした永住層の多い島というところで、地域生活のあり方について、「しきたり」や「人びとの和」を大切にするという態度よりも、「協力し合う」というニュアンスの方がずっと高く選択されていることにここでは注目したいと思う。

では、永住指向との関係はどうであろうか。(表Ⅲ—10)「他出指向的永住型」と「消極的永住型」とが「伝統型」と「自主協調型」において対照的な傾向を示し「積極的永住型」がこの中間的な存在である。すなわち、他出指向的永住型」では「伝統型—協調」が33パーセントで他と比べて一番高いが、「消極的永住型」では23パーセントで永住型の中では一番低い。逆に「他出指向的永住型」では「自主協調型」が45パーセントで永住型の中では一番低く、「消極的永住型」は一番高い。そしてこの類型は「権利型」も一番高く、「協力し合う」という態度と「生活上の不満や要求はできるだけ行政に反映させていくのが住民の権利」であるという考え

方が典型的にみられるといえよう。また、前述したように、生活上の悩みで「人に気を使わなければいけない」という悩みをもっている人が6割以上もいて他の類型と有意差がみられたが、このことは、「伝統型—協調」で示されている「人びとの和」をささえる「気の使い方」をマイナスのイメージでとらえる傾向を意味するだろうと思われる。これが「消極的永住型」に「伝統型—協調」により「自主協調型」をより多く選択させたひとつの要因となっているのではないだろうか。

なお、「消極的流出型」と「地元拒否型」では、どちらも「自主協調型」が一番多い点では、永住型と同様であるが、「伝統—協調型」が低く、逆に「無関心型」が有意に高い点に特徴がある。とくに「地元拒否型」では20パーセントもおり永住型が2～6パーセントのきわめて低い割合しか示していない点と対照的である。「ここでくらしたくない」という人々にとって、ここに「愛着や関心」はなく、従ってここでくらす人々に任せるということなのだろう。この意味では、地域社会をより住みよくしようとする現実のにない手は、やはり地域に深くかかわりあう人々の中に存在するといえよう。

性・年令別と地域生活のあり方とではこの二つの属性間に相関関係はみられない。従って年令別による地域生活のあり方に対する態度の違いはほとんどないという特徴をあげることができる。但しこまかくみると、女性の20代前半と50代以降では非常に対照的な傾向を示している。前者は「伝統型—協調」(19パーセント)が有意に低く「自主協調型」(58パーセント)が有意に高い。これに対し後者は逆の傾向を示し、「伝統型—協調」は41パーセントで一番多く、「自主協調型」は37パーセントで二番目に選択されている。「自主協調型」はどの年令層でも一番多いが、この女性・50代のみが二番目で順序が入れかわっている点に注目したい。また、男性の場合の20代前半は女性にとは違って、「伝統型—協調」(25パーセント)は50代の次に高く、「伝統型—犠牲」(11パーセント)をあわせると36パーセントになる。「自主協調型」が39パーセントなので、両者の差はほとんどなく、その点で男性50代とよく似た傾向を示している。同じ男性の20代でも後半はまったく対照的な傾向を示し「自主協調型」(61パーセント)は「伝統型—協調」の約3倍の多さである。この両者の違いは何によるものかここでは明らかではないが興味深い点である。

(2) 地域問題解決への態度

では、もし、島の生活環境に重大な問題がおきた時、これを解決するのにあたってどのような態度をとるのだろうか。ここでは、解決の主体として、①まず自分で考えるのか—個人指向それとも②他者に任せてしまうのか—他者指向・その他者は誰か、あるいは③所属集団などで集団的にとりあげるのか—集団指向についてみてみたい。全体的には、①の「島の住民ひとりひとりが、その問題を考えるべきである」が7割近くで非常に多く、②の他者に任せるの2割近くを大きく引きはなしている。この他者は、「町長や町会議員にまかせる」(10パーセント)が一番多く、他者に任せるという人々の中では半数近くを占めることになる。あとは、「家のあととりや男の人にまかせる」「部落などの有力者にまかせる」「町役場の人にまかせる」が2～3パーセントであり、非常に少ないといえよう。③の「青年団や婦人会などでとりあげて考える」は7パーセントであるが男性の20代後半(10パーセント)と女性の30代前半(15パーセント)がそれぞれ他より有意に高く、この年令層が青年団、婦人会の活発なメンバーであることが伺える。なお、個人指向では男性と女性との間に有意差がみられ、男性では78パーセントであるのに対し女性ではそれをはるかに下回る58パーセントである。この低い分だけ女性では他者指向と集団指向が高くなっている。他者指向では「町長や町会議員」は20代前半を除い

表Ⅲ－11　地域生活のあり方と地域問題解決への態度

地域生活のあり方＼問題解決への態度		(計)	個人	他者				集団		**
			島の住民ひとりひとりがその問題を考えるべき	家のあととりや部落などの有力者にまかせる	町役場の人にまかせる	町長や町会議員にまかせる	部落などの有力者にまかせる	青年団や婦人会などでとりあげて考える	わからない	NA
		1332	67.7	3.0	1.7	9.8	2.5	6.5	5.0	3.9
伝統型	協調	374	65.8	4.5^{+}	1.6	12.0	2.7	4.5^{-}	6.1	2.7
伝統型	犠牲	97	73.2	1.0	0.0	15.5^{+}	0.0	6.2	3.1	1.0
無関心型		45	40.0^{-}	15.5^{+}	4.4	6.7	8.9^{+}	2.2	17.8^{+}	4.4
権利型		140	65.7	3.6	3.6^{+}	10.0	2.1	7.1	4.3	3.5
自主協調型		617	73.6^{+}	1.1^{-}	1.0^{-}	7.9^{-}	2.6	8.1^{+}	3.4^{-}	2.3
DK・NA		59								

てはすべて男性を上回っており、集団指向もとくに30代～40代前半は男性の倍近く（12～13パーセント）になっている。

次に、前述の地域生活のあり方とクロスさせると（表Ⅲ—11）、まず目につくのは、「個人指向」は「自主協調型」が74パーセントで有意に高く、「他者指向—町長の町会議員」は「伝統型—協調」と「伝統型—犠牲」が12パーセントと16パーセントで有意に高い点である。この「個人指向」と「自主協調型」、「他者指向—町長・町会議員」と「伝統型」の結びつきは予想どおりともいえるが、逆に、町長・町会議員に任せるという人131人の地域生活のあり方をみると、「伝統型—協調」は34パーセント、「自主協調型」は37パーセントで、両者にはほとんど差がない。ふだんの生活では協力しあうことが大切であり、何か重大な問題がおきた時は、町長らに一任するという態度に数字のうえでは少数派ではあるがひとつの典型的な住民の地域生活への態度が伺えよう。「無関心型」は、他の類型と非常に異なった傾向をもっており、「個人指向」は40パーセントで有意に低く、「他者指向—あととり」（16パーセント）と「他者指向—部落などの有力者」（9パーセント）が有意に高い。ここから、「無関心型」では、自分の家族や部落という face to face の関係の成立している狭い範囲の人にまかせるという傾向があることがわかるし、また、「わからない」（18パーセント）が他と比べて非常に高い点からも地域生活の諸問題に無関心であるといえよう。

(3)　島の将来像

能登島の住民は、将来どのような島になったらよいと考えているのだろうか。次のような5つの例をあげ、ひとつだけえらんでもらった。

① 将来は、島に工場などを誘致して、働くところをたくさんつくり、若い人たちが出ていかないようにする。……「青年層流出阻止型」

② 将来は、観光施設や民宿をたくさんつうり、観光地として発展していったらよい。……「観光地型」

③ 農業や漁業を中心として、加工品などにも力を入れて発展していったらよい。……「農・漁業発展型」

④ 「大橋」がかかれば、島というより七尾の一部となるので、七尾とともに発展していったらよい。……「七尾指向型」

⑤　現在のままでよいと思う、……「現状維持型」

このうち、一番多かったのが「青年層流出阻止型」(41パーセント）であり、次が「農・漁業発展型」(33パーセント）である。この二つのあり方が住民の多数に支持をうけているわけで、少数派としては「七尾指向型」(10パーセント)、及び「観光地型」(7パーセント）である。「大橋」は島の観光地化を招くのではないかという期待と不安がある中で、島の将来像として「観光地型」よりは、青年層流出による過疎化の進行をくいとめる手段として、「島に工場などを誘致して働くところをたくさんつくる」方が強く期待されているといえよう。但し、この手段が現実にどの程度可能なのかはかなりむずかしい問題である。島の限られた面積や水の問題、輸送上の問題など立地条件を考えるといろいろな制限があるわけだが、ここでは力点がむしろ、「働くところをたくさんつくる」それによって、「若い人たちが出ていかないように」ということにおかれていることに注目したいと思う。ここには、島の発展のにない手として、青年層の存在が強く要望されていることが伺える。そして、この青年層の「働くところ」が島にないので、よそに求めて出ていく傾向に対してそれを何とかしなければという意識が強くあることがわかる。

これに対して、「農・漁業発展型」は、現在の島の中心産業を中心として、これによる島の発展を考えているといえよう。すなわち、「青年層流出阻止型」がその手段として第二次産業の発展を望んでいるのに対し、「農・漁業発展型」は第一次産業の発展を望んでいる。そして、これは島の住民の多くが農・漁業に従事している現在のその状態を土台として島を発展させることを意味しているわけだが、順位では第二位である点に、島の将来像よりむしろ生活像が伺えよう。なお、この島の将来については、住民のすんでいる地区によって違いがみられ、現在の地域的な生活・産業の差が出ている。(表Ⅲ—12）地区毎の特徴を記すと

①　「東」……「農・漁業発展型」が有意に高く、「七尾指向型」は有意に低い

②　「中」……「青年層流出阻止型」が有意に高く、他の地区よりこれに集中している。すなわち、第二位「農・漁業発展型」との差が「東」は5パーセント、「西」はなしであるのに対し、「中」は23パーセントと大きく開いている。

③　「西」……「七尾指向型」が有意に高く、「青年層流出阻止型」が有意に低い。

ここからわかることは、人口のもっとも多い「向田」(120戸）を中心とし、役場・公民館などのある「中」では、第二次産業の発展による青年層流出阻止を望むものが非常に多く、農・漁業のさかんな「東」では「農・漁業発展型」を望むものが他地区よりは多い。但し、「東」地区の中で一番多いのは「青年層流出阻止型」である。そして、「大橋」との関係では、「大橋」がかかる地区である「西」と、そこからはもっとも遠い「東」とでは、「七尾指向型」は対照的

表Ⅲ－12　地区×島の将来像

島の将来像 / 地区	(計)	青年層流出阻止型	観光地型	農・漁業発展型	七尾指向型	現状維持型	DKNA**
	1332	41.6	7.4	32.9	10.1	6.5	2.6
東	587	41.1	6.3	35.6^{+}	7.3^{-}	7.0	
中	357	46.5^{+}	9.0	25.8^{-}	9.5	7.6	
西	382	35.1^{-}	7.9	35.3	14.1^{+}	4.5^{-}	
DK・NA	6						

表Ⅲ－13　永住指向の諸類型×島の将来像

島の将来 ＼ 永住指向	(計)	青年層流出阻止型	観光地型	農・漁業発展型	七尾指向型	現状維持型	DKNA**
	1332	41.6	7.4	32.9	10.1	6.5	2.6
積極的永住型	863	41.8	6.1⁻	36.0⁺	8.6⁻	5.9	
消極的永住型	218	39.0	7.8	30.7	13.3⁺	6.4	
他出指向的永住型	118	34.7	13.5⁺	32.2	11.9	7.6	
消極的流出型	27	40.7	14.8	11.1⁻	14.8	14.8⁺	
地元拒否型	30	26.7	16.7⁺	13.3⁻	23.3⁺	16.7⁺	
DK・NA	76						

な傾向を示している。

では、次に「永住指向」との関係をみると（表Ⅲ—13)、「積極的永住型」では、「青年層流出阻止型」(42パーセント）が一番多いが、有意差をみると「農・漁業発展型」(36パーセント)が高く、「七尾指向型」（9パーセント）と「観光地型」（6パーセント）が低い、「一生にここに住んでいたい」という人々にとって、島は自然の利を生かした「農・漁業」を中心に発展するのが望ましく、また、老人と子どもだけの島とならないためにも若い人たちが島で生活できるよう「働くところ」をつくることを望んでいるといえよう。「消極的永住型」では「七尾指向型」(13パーセント）が有意に高いのが特徴である。「ここでくらしたくないが」という背景には島であるこおへの拒否があるのだろうか。「他出指向的永住型」では、「観光地型」(14パーセント）が有意に高い点が注目される。ここで一番問題なのは、「青年層流出阻止」といっても、彼らが「外に出ていく」理由には、単に「働くところ」を求めてというだけではない点である。そしてこの点にこそ島のあり方のむずかしさがあるといえるのではないだろうか。すでに島を出ていった人たちは、都会で労働力としてやとわれ、狭いアパートに住み、公害などにも悩まされ、鮮度の落ちた魚や野菜を食べてくらしている場合も多いと思われる。能登島は「豊かな自然や静かな環境」に恵まれ、住居も広く、食物も新鮮なものが手に入り、都会では失なわれているものやないものがあるが、それを上回って若者たちを流出させる要因が都会にも島にもあると思う。もっとも外へ出ていくということが必ずしも否定的評価でとらえられる必要はなく、適度の地域移動は地域社会に活気を与える要因でもある。但し、島の場合は流入層が非常に少ないので、外へ出ることが「他出指向永住型」になることも必要であり、またその人々がどの時点でどのような形で島にもどってくるかが問題になるだろう。

なお、「消極的流出型」と「地元拒否型」では「現状維持型」が有意に高く、「農・漁業発展型」は最下位である点が注目される。また「地元拒否型」では「七尾指向型」が23パーセントと有意に高く、島ではなく七尾市になることを望んでいることが伺える。

住民の65パーセントを占める「積極的永住型」を住民の典型的タイプと考えるなら、「農・漁業」を中心にそれを発展させていくことが望まれ、同時に若い人たちの流出をくいとめるために「働くところ」をつくっていく必要があり、「観光地」になることはあまり望んでいないことという方向で島の将来像がえがかれているといえよう。なお、島の人口数についてどのように考えているかをみると（表Ⅲ—14)、もっとも多いのが「ある程度まではふえてほしい」(41

表Ⅲ－14　人口数×島の将来

島の将来 ＼ 人口数	(計)	青年層流出阻止型	観光地型	農・漁業発展型	七尾指向型	現状維持型	DK NA**
	1332	41.6	7.4	32.9	10.1	6.5	2.6
もっとどんどんふえてほしい	244	55.7+	11.5+	19.7−	9.0	3.3−	
あるていどまではふえてほしい	542	37.3−	7.4	37.4+	12.7+	5.2	
今のていどが適当だと思う	372	35.7−	7.0	38.7+	8.3	9.4+	
もっとへったほうがよい	19	47.4	0.0	31.6	10.5	10.5	
わからない	114	46.5	4.4	28.1	7.0	11.4+	
N　A	41						

パーセント)、次が「今のていどが適当だと思う」(28パーセント)である。そして、この二つともが、「農・漁業発展型」を強く望んでいることがわかる。これに対して、「もっとどんどんふえてほしい」(18パーセント)では「青年層流出阻止型」に集中しており過半数以上を占めている。この「もっとどんどんふえてほしい」は男性の20代前半(33パーセント)と30代前半(28パーセント)と女性の20代後半(30パーセント)が有意に高く、青年層のひとつの強い意向を感じる。また、「農・漁業発展型」ではその労働力吸収にやはり一定の限界があることを意味してか、あるいは、島のいろいろな条件を考えると今ぐらいが適性規模だと思うのか、はっきりはわからないが、「今のていどが適当だと思う」人にこのような島の将来像が強いことは注目されよう。

地域社会のあり方や発展はそこでくらす人々の生活の基盤や、生活環境を規定し、また逆に規定される。だからこそそこでくらす人々によって守られ育てられていくものであるが、応々にして地域開発は地域住民以外の、例えば大資本などが中心となり、利潤の論理のみが優先し貫徹していく結果、自然環境の破壊や地域生活の崩壊が顕著になる場合も見受けられる。この意味で、住民たちが「大橋」がかかったあとの島の生活について、日常生活における交通手段と自然や生活環境の破壊においてとくに不安や心配をしている点は十分考慮されなければならないと思う。そして、島の悲願であり夢の大橋であるという面と地域開発の手段としての大橋のもつ現実的な面との落差が、今後どのような形で島の将来を方向づけていくのか、また、住民のえがく島の将来像とどうからみあっていくのかは今後の重要な課題である。

Ⅲの注

注1)表においては百分率が少数点1位まで表示されているが本文中ではそこまで細かく見る必要がないので整数値で示してある。

注2)この調査は奥田道大が八王子調査で使用したモデルを地域でも適用したものである。この一連の調査の主旨と結果については、奥田道大「コミュニティ形成の論理と住民意識」磯村英一他編『都市形成の論理と住民』1971、東大出版会、所収　松原治郎編著『住民の参加と自治の革新』1974、学陽書房を参照されたい。なお、所沢調査は「所沢—市民意識の現実と課題—」1974、日本都市センター　金沢調査は古屋野正伍他編著「現代日本のコミュニテイ」1975、川島書店を参照されたい。

(石原　多賀子)

Ⅳ　学習に関する事項

1　学習要求について（内容）

能登島町民の学習についての希望や考え方ならびに実際の行動などを知るためのいくつかの設問を用意したが、まずはじめに、どのようなことがらをどのくらいの強さで学びたい気持を持っているのかを見てみよう。

多少とも学びたいという気持を持っているという人がもっとも多いのは、職業に関係するものであり、65%になっている。学校時代に学んだことを補うようなことを学びたいという人の比率が36%ほどでもっとも低いほかは、どのようなことがらについても、半数内外の人は、程度の差こそあれ、学びたい気持を持っているようである。また、学びたい気持を強く持っている人が多いのは、職業に関するものと、子どもの教育に関するもので、いずれも20%以上になっている。（第1表）

第1表

内容＼学習意欲	とても学びたい	多少学びたい	あまり学びたいと思わない	ただ学びたいとまったく思わない	無回答	計
職業についての知識・技術や職場の人間関係に関するもの	25.8	39.6	10.8	4.4	19.4	100.0
市民としての政治的・社会的知識や感覚を身につけるもの	14.3	41.2	15.7	4.4	24.4	100.0
家庭生活に必要な知識・技術に関するもの	18.8	40.2	13.1	2.9	25.0	100.0
教養を身につけるもの	16.1	39.2	14.6	3.4	26.7	100.0
学校時代に学んだことを補う学習	7.4	28.9	27.1	7.2	29.4	100.0
子どもの教育に関するもの	22.3	34.3	12.9	3.8	26.7	100.0
体育・レクリエーション活動や健康に関するもの	13.0	35.4	18.1	4.7	28.8	100.0
趣味をゆたかにするもの	16.9	35.8	17.3	3.3	26.7	100.0

学びたいという気持を持っている人に対して、それをどういうしかたで学びたいのかを聞いた結果が（第2表）である。職業に関するもの、政治的・社会的なことがら、教養的なもの、子どもの教育に関するものは専門家の話をきく方式、家庭生活に関するもの、体育・レクリエーション、趣味といったものは仲間同士での方式を希望する人が多くなっている。

ここにあげた学習領域（内容）ごとに、どのような人が、どのように要求しているのかを性・年令という点からみてみると、次のようなことが特長としてあげられる。（第3表）

(1)　職業に関する内容については、男性では、20才代から30才代前半の人にその要求が強く、

第2表

内容＼学習希望方式	先生の専門家による講話方式	学校の教室などに集まって仲間がいっしょに話し合う方式	テレビなどを利用する方式	無回答	計
職業についての知識・技術や職場の人間関係に関するもの	34.3	24.6	6.3	34.8	100.0
市民としての政治的・社会的知識や感覚を身につけるもの	31.0	19.8	7.3	41.9	100.0
家庭生活に必要な知識・技術に関するもの	22.1	27.9	8.9	41.1	100.0
教養を身につけるもの	30.9	15.5	8.3	45.3	100.0
学校時代に学んだことを補う学習	19.9	16.4	8.0	55.7	100.0
子どもの教育に関するもの	34.2	15.5	6.2	44.1	100.0
体育・レクリエーション活動で健康に関するもの	16.7	25.8	8.3	49.2	100.0
趣味をゆたかにするもの	17.3	28.3	9.3	45.1	100.0

逆に、40代後半から50才代になると比率が低くなっている。また、女性の場合は、要求の強い層は20代後半から30代前半であり、40代以上では比率が低く、男性にくらべて、要求の強い層の範囲は狭く、弱い層の範囲は広いことがわかる。総じていえば、職業に関しての学習要求には男性と女性のあいだにははっきりした差がある、といえそうである。

(2) 政治的・社会的なことがらについてもっとも目立つ傾向は、女性の場合、40才代になると強い学習要求を持つ人の比率が急激に低く学びたくないという比率が高くなっていることである。

(3) 家庭生活に関することがらについては、40才代以下ではどの年令段階でも強い学習要求を持つ人の比率は女性の方が高くなっている。女性の場合、40才以上になると、学びたいと思わない人、何ともいえないという人の比率が高くなるのが特徴的である。

(4) 教養的なもの

教養を身につけるための学習をしたいという強い気持を持っているのは、男性では20才代の前半、女性では20才代と30才代の前半にわたっている。また、50才以上の人では、強く希望する人の比率が低いことと、40才代以上の人では男女とも、なんともいえないという比率が高くなっているのが目立っている。

(5) 学校時代に学んだことの補ない

総体的にいっても、もっとも学習要求の低い領域であるが、男性では40才以上、女性では35才以上の人の場合とくに比率が低くなっている。

(6) 子どもの教育に関するもの

男性では20才代の後半から40才代の前半、女性では20才代と30才代の範囲の人に、強い学習要求を持っている人の比率が高いといえる。なかでも、男性の場合は30才代、女性では20代後半と30才代前半の人の比率はとくに高くなっている。多少学びたいという、やや弱い程度の

人も加えると、女性では20才代、30才代の人の80%もの人が子どもの教育に関しては学習要求を持っている。

(7) レクリェーションや健康

この領域への強い学習要求を持っている人をみると、男性では20才代と30才代前半、30才代後半と40才代前半、そして、40才代後半以上の人という三つのグループの順にその比率が低くなり、女性の場合は20才代、30才代そして、それ以上という三つのグループに分れる傾向がみとめられる。

(8) 趣味をゆたかにするもの

男性の場合はレクリェーションの場合とまったく同じ三つのグループに別れている。つまり、20才代から30才代前半までの人がもっとも強く希望する層である。女性では、40才代になると、強く希望する人の比率が低くなっている。

第3表－1（職業）

性	学習意欲 / 年令	とても学びたいと思っている	多少学びたいと思っている	あまり学びたいとは思わない	まったく学びたいとは思わない	無回答	計
男	20～24才	52.3	30.2	7.9	4.8	4.8	100.0
	25～29	45.5	40.5	8.9	1.3	3.8	100.0
	30～34	48.7	38.7	5.0	1.3	6.3	100.0
	35～39	34.6	40.6	7.8	3.1	13.9	100.0
	40～44	29.0	48.4	8.6	1.1	12.9	100.0
	45～49	21.6	47.4	12.4	3.1	15.5	100.0
	50才代	15.4	39.0	9.9	4.4	31.3	100.0
女	20～24	26.6	54.6	6.3	4.7	7.8	100.0
	25～29	36.7	39.2	17.7	1.3	5.1	100.0
	30～34	28.8	47.4	11.3	0	12.5	100.0
	35～39	28.3	36.7	18.3	1.7	15.0	100.0
	40～44	13.5	46.0	16.9	6.7	16.9	100.0
	45～49	12.8	44.7	10.6	7.4	24.5	100.0
	50才代	12.6	25.2	10.1	13.4	38.7	100.0

第3表－2 （市民性）

性	学習意欲 / 年令	とても学びたいと思っている	多少学びたいと思っている	あまり学びたいとは思わない	まったく学びたいとは思わない	無回答	計
男	20～24才	33.3	38.2	9.5	7.9	11.1	100.0
	25～29	17.7	56.9	16.5	5.1	3.8	100.0
	30～34	29.9	46.2	11.3	1.3	11.3	100.0
	35～39	20.3	46.9	10.9	3.1	18.8	100.0
	40～44	18.3	49.4	8.6	2.2	21.5	100.0
	45～49	14.4	48.5	16.5	3.1	17.5	100.0
	50才代	13.7	31.9	14.3	3.8	36.3	100.0
女	20～24	10.9	45.3	29.7	4.7	9.4	100.0
	25～29	19.0	48.0	20.3	3.8	8.9	100.0
	30～34	10.0	48.7	20.0	3.8	17.5	100.0
	35～39	13.3	60.0	11.7	3.3	11.7	100.0
	40～44	2.2	43.9	24.7	2.2	27.0	100.0
	45～49	6.4	36.1	21.3	4.3	31.9	100.0
	50才代	8.4	22.7	15.1	10.9	42.9	100.0

第３表－３　（家庭生活）

性	学習意欲 / 年令	とても学びたいと思っている	多少学びたいと思っている	あまり学びたいとは思わない	まったく学びたいとは思わない	無回答	計
男	20～24才	20.6	44.5	19.0	3.2	12.7	100.0
	25～29	19.0	46.8	26.6	2.5	5.1	100.0
	30～34	23.8	49.8	13.8	1.3	11.3	100.0
	35～39	9.4	51.5	20.3	1.6	17.2	100.0
	40～44	25.8	37.7	11.8	0	24.7	100.0
	45～49	10.3	38.2	21.6	4.1	25.8	100.0
	50才代	11.5	26.9	12.6	4.9	44.1	100.0
女	20～24	40.7	35.9	12.5	0	10.9	100.0
	25～29	34.2	46.7	8.9	1.3	8.9	100.0
	30～34	26.3	46.2	10.0	0	17.5	100.0
	35～39	18.3	70.0	1.7	0	10.0	100.0
	40～44	23.6	39.4	13.5	2.2	21.3	100.0
	45～49	16.0	44.7	7.4	5.3	26.6	100.0
	50才代	9.2	34.5	10.9	8.4	37.0	100.0

第３表－４　（教養）

性	学習意欲 / 年令	とても学びたいと思っている	多少学びたいと思っている	あまり学びたいとは思わない	まったく学びたいとは思わない	無回答	計
男	20～24才	28.6	46.0	9.5	4.8	11.1	100.0
	25～29	16.5	45.5	27.8	5.1	5.1	100.0
	30～34	20.0	53.7	15.0	1.3	10.0	100.0
	35～39	15.6	39.1	25.0	3.1	17.2	100.0
	40～44	21.5	46.3	7.5	0	24.7	100.0
	45～49	13.4	37.1	18.6	4.1	26.8	100.0
	50才代	8.2	27.5	15.4	4.4	44.5	100.0
女	20～24	26.6	49.9	12.5	1.6	9.4	100.0
	25～29	25.3	54.5	7.6	2.5	10.1	100.0
	30～34	27.5	43.7	11.3	—	17.5	100.0
	35～39	11.7	61.7	13.3	—	13.3	100.0
	40～44	11.2	39.4	19.1	—	30.3	100.0
	45～49	13.8	31.9	16.0	5.3	33.0	100.0
	50才代	6.7	27.7	14.3	9.2	42.1	100.0

第３表－５　（補習）

性	学習意欲 / 年令	とても学びたいと思っている	多少学びたいと思っている	あまり学びたいとは思わない	まったく学びたいとは思わない	無回答	計
男	20～24才	15.9	33.3	30.2	9.5	11.1	100.0
	25～29	8.9	29.1	49.3	7.6	5.1	100.0
	30～34	15.0	33.8	37.4	3.8	10.0	100.0
	35～39	10.9	40.6	23.4	6.3	18.8	100.0
	40～44	6.5	37.6	25.8	5.4	24.7	100.0
	45～49	4.1	25.8	30.9	10.3	28.9	100.0
	50才代	2.7	19.2	19.2	9.9	49.0	100.0
女	20～24	12.5	28.1	37.5	6.3	15.6	100.0
	25～29	12.7	37.9	31.6	5.1	12.7	100.0
	30～34	11.3	43.7	27.5	0	17.5	100.0
	35～39	8.3	45.0	28.3	1.7	16.7	100.0
	40～44	4.5	37.1	22.5	6.7	29.2	100.0
	45～49	4.3	26.6	23.4	8.5	37.2	100.0
	50才代	4.2	16.0	20.2	13.4	46.2	100.0

第３表－６　（子どもの教育）

性	学習意欲 / 年令	とても学びたいと思っている	多少学びたいと思っている	あまり学びたいとは思わない	まったく学びたいとは思わない	無回答	計
男	20～24才	15.9	38.1	25.4	7.9	12.7	100.0
	25～29	22.8	46.8	21.5	3.8	5.1	100.0
	30～34	27.5	51.2	10.0	2.5	8.8	100.0
	35～39	29.7	35.9	15.6	1.6	17.2	100.0
	40～44	22.6	42.9	9.7	1.1	23.7	100.0
	45～49	12.4	35.0	20.6	5.2	26.8	100.0
	50才代	10.4	23.1	12.6	6.6	47.3	100.0
女	20～24	42.2	39.1	7.8	0	10.9	100.0
	25～29	51.9	32.9	6.3	0	8.9	100.0
	30～34	44.9	40.0	3.8	0	11.3	100.0
	35～39	33.3	50.0	1.7	0	15.0	100.0
	40～44	21.3	31.6	21.3	2.2	23.6	100.0
	45～49	16.0	36.1	12.8	3.2	31.9	100.0
	50才代	7.6	24.4	13.4	10.9	43.7	100.0

第３表－７　（レク・健康）

性	学習意欲 / 年令	とても学びたいと思っている	多少学びたいと思っている	あまり学びたいとは思わない	まったく学びたいとは思わない	無回答	計
男	20～24才	27.0	42.8	12.7	3.2	14.3	100.0
	25～29	21.5	47.9	24.1	1.3	5.2	100.0
	30～34	26.3	38.6	22.5	1.3	11.3	100.0
	35～39	14.1	48.3	14.1	4.7	18.8	100.0
	40～44	12.9	45.2	16.1	3.2	22.6	100.0
	45～49	8.2	27.8	26.8	7.2	30.0	100.0
	50才代	6.0	19.8	15.4	9.3	49.5	100.0
女	20～24	25.0	40.6	17.2	3.1	14.1	100.0
	25～29	24.1	41.7	22.8	1.3	10.1	100.0
	30～34	12.5	53.7	16.3	2.5	15.0	100.0
	35～39	11.7	54.9	16.7	0	16.7	100.0
	40～44	7.9	34.9	24.7	2.2	30.3	100.0
	45～49	7.4	39.3	16.0	4.3	33.0	100.0
	50才代	5.0	21.8	16.8	11.8	44.6	100.0

第３表－８　（趣味）

性	学習意欲 / 年令	とても学びたいと思っている	多少学びたいと思っている	あまり学びたいとは思わない	まったく学びたいとは思わない	無回答	計
男	20～24才	27.0	47.6	7.9	4.8	12.7	100.0
	25～29	26.6	43.0	25.3	0	5.1	100.0
	30～34	23.8	49.9	15.0	1.3	10.0	100.0
	35～39	17.2	43.6	18.8	1.6	18.8	100.0
	40～44	19.4	37.6	20.4	0	22.6	100.0
	45～49	9.3	28.9	27.8	6.2	27.8	100.0
	50才代	8.8	24.2	15.9	4.9	46.2	100.0
女	20～24	26.6	48.5	10.9	3.1	10.9	100.0
	25～29	32.9	35.4	20.3	2.5	8.9	100.0
	30～34	26.3	44.9	12.5	0	16.3	100.0
	35～39	26.7	48.3	10.0	0	15.0	100.0
	40～44	11.2	36.1	25.8	1.1	25.8	100.0
	45～49	9.6	39.3	17.0	4.3	29.8	100.0
	50才代	8.4	24.4	16.8	9.2	41.2	100.0

次に、この学習要求を地域との関係で見てみよう。まずはじめに、学びたい気持を強く持っているという人の比率を各地域ごとにその順位を列挙すると次のようになる。（第4表―1）

第4表―1

内容／地区	職業	市民性	家庭生活	教養	補習	子どもの教育	体育・レク	趣味
東　部	24.9	13.1	17.2	15.7	7.8	21.5	12.4	16.2
中　部	27.7	16.2	24.1	20.4	9.0	28.3	15.4	21.3
西　部	25.4	14.7	16.8	12.8	5.5	18.3	11.8	14.1

表からわかるように、学校時代に学んだことを補う学習と、体育・レクリェーション活動がどの地域でも下位の率となっているのが共通の傾向となっている。逆に、職業に関係することがらと、子どもの教育に関するものは、前の場合とちがって同一の順位ではないが、上位の1位・2位のいずれかの高率を占めるという共通の傾向であり、これら2つの領域には、どの地域の人も高い学習要求を有している、といってよさそうである。家庭生活に関するものは、どの地域でもいずれも第3位であり、その他のものは4～6位の、いわば中間的な順位を占めている。

つぎに、多少学びたいと思っているというやや弱い学習要求を持っている人の比率を示したのが、（第4表―2）である。

第4表―2

内容／地区	職業	市民性	家庭生活	教養	補習	子どもの教育	体育・レク	趣味
東　部	39.2	41.9	42.1	40.4	29.3	35.6	37.3	35.4
中　部	39.8	40.9	37.5	38.4	27.5	27.5	34.2	35.9
西　部	40.1	40.6	39.3	38.2	29.6	29.6	33.8	36.4

この表から各地域の特徴的なことがらとしては次のようなことが見出される。まず第一には、強い学習要求の場合と同じく、学校時代に学んだことを補なう学習がもっとも低率であることが共通の傾向となっていることである。（ちなみに、これはあまり学びたいとは思わない、まったく学びたいとは思わないという比率はどの地域においても最高率を占めている）。その他の領域の場合は、強い学習要求の場合ほど共通の傾向は強くあらわれていない。東部地区では家庭

生活に関するものが第1位であるが、中部、西部の2地区では市民としての政治的・社会的知識や感覚を身につけるものが第1位となっている。この2地区は、職業に関するものがいずれも第2位であり、やや共通した傾向を示しているものといえそうである。

強い学習要求とやや弱い学習要求の比率を合計して、多少なりとも学習要求を有している人の比率を示したものが、次の（第4表—3）である。

第4表—3

内容／地区	職業	市民性	家庭生活	教養	補習	子どもの教育	体育・レク	趣味
東　部	64.2	55.0	59.3	56.1	37.1	57.1	49.7	51.6
中　部	66.5	57.1	61.6	58.8	36.5	60.0	49.6	57.2
西　部	65.5	55.1	56.1	51.0	35.1	52.6	45.6	50.5

やや弱い学習要求の所では、地区によって若干の差が見られたが、この差においてはかなりの共通性がみとめられるようである。すなわち、職業に関する領域への学習要求から地区に共通して第1位の高率を占め、家庭生活に関係するものが第2位となっているのが3地区いずれの場合にも共通であり、学校時代に学んだことを補う学習への要求はいずれの地区でも共通してもっとも低率である。そのほかも、だいたいにおいて、体育・レクリェーション活動がいずれの地区でも第7位であるように、ほぼ似かよった傾向であるが、市民としての政治的・社会的知識といったものへの要求だけは例外的に、西部地区では第3位とかなり上位に位置しているにもかかわらず、東部地区では5位、中部地区では第6位であり、やや異なった傾向を示している。架橋問題の影響と見ることができるかもしれない。

各地域への学習要求を順位ではなしに、比率そのもので、各地区の特徴を記すと、次のようなことが見出される。3地区を比較してもっとも特徴的な地区は東部地区のようである。すなわち、職業、市民性、家庭生活、教養、趣味の5つの領域において、あまり学びたいと思わないという人の比率が他の2地区とくらべて高くなっており、多少とも学びたいという人の比率が高い領域は1つもない。やや短絡的ないいかたをして言えば、この東部地区の人が、3地区の中ではもっとも学習要求が低い、ということになりそうである。逆に、中部地区の人の場合は、家庭生活、教養、子どもの教育、趣味の4領域において強い学習要求を示した人の比率が高く、前と同じで、やや短絡的にいえば、この地区の人が、能登島町においてはもっとも学習要求が強い、といってよさそうである。西部地区の場合は、教養、学校の補習、子どもの教育、趣味の4領域において強い学習要求を持つ人の比率が、他の2地区にくらべて低いのが特徴のようである。

次に、これらの内容を学習する方式についての意見を領域の順を追って各地区別に見てみよう。（第5表）　まず、職業に関するものであるが、どの地区でも専門家の講義方式を希望する人がもっとも多く30%を若干上廻り、話し合い方式がいいという人が20%を若干上廻る比率で第2位となっている。テレビ利用に期待する人はいずれの地区でも少ないが、その中では西部地

第5表

内容 / 方式 / 地区	職業				市民性				家庭生活				教養				補習			
	イ	ロ	ハ	ニ	イ	ロ	ハ	ニ	イ	ロ	ハ	ニ	イ	ロ	ハ	ニ	イ	ロ	ハ	ニ
東部	36.6	23.7	3.9	35.8	31.5	18.7	7.5	42.3	24.7	24.9	9.5	40.9	31.9	14.1	10.1	44.0	21.5	16.4	8.9	53.3
中部	31.9	26.3	7.6	34.2	29.7	22.1	7.0	41.2	17.9	36.4	5.9	39.8	33.3	17.9	5.3	43.4	18.2	18.2	7.6	56.0
西部	33.2	24.3	8.9	33.6	31.7	19.1	7.3	41.9	22.5	24.6	10.7	42.1	27.0	15.2	8.4	49.5	19.1	15.2	7.1	58.6

内容 / 方式 / 地区	子どもの教育				体育・レク				趣味			
	イ	ロ	ハ	ニ	イ	ロ	ハ	ニ	イ	ロ	ハ	ニ
東部	34.6	14.3	6.5	44.6	19.1	24.9	7.7	48.4	21.0	25.2	9.0	44.8
中部	37.8	18.5	4.5	39.2	14.3	28.3	9.5	47.9	14.6	34.2	8.1	43.1
西部	30.4	14.9	7.1	47.6	15.4	24.9	8.1	51.6	14.1	27.7	10.7	47.4

区の比率がやや高く、東部地区がやや低くなっている。

市民性に関しては、上と同様、専門家の講義、話し合い方式が1位・2位の順となっている。東部及び西部地区ではその差はやや大きいが、中部地区の比率は接近している。

家庭生活に関しては、どの地区でも話し合い方式を希望する人がもっとも多くなっている。なかでも、中部地区の人の場合は、東部及び西部地区の人にくらべてとくにその比率が高くなっている。講義方式を希望する人は東部地区に多く、中部地区に少ないという差がみられる。

教養に関しては、どの地区でも講義方式を希望する人が多く、話し合い方式をという人とのあいだにはかなり大きな差があるが、地区間では西部地区の場合が、他の2地区にくらべてその率は低くなっている。

学校教育の補習については、講義方式、話し合い方式ともその比率はあまり高くなく、両者のあいだにもそれほどの差はない。

子どもの教育に関しては、どの地区でも講義方式を希望する人が30%を越えて第1位であり、話し合い方式とのあいだにはかなりの比率の開きがみとめられる。しかし、地区間では、中部地区と西部地区のあいだでは差がみとめられる。また、中部地区では、話し合い方式がいいという人の比率も、他の2地区にくらべると高くなっている。

体育・レク活動については、いずれの地区も仲間といっしょにという方式を希望する人がもっとも多いが、東部地区では専門家を呼んでという希望もいくらか多いようである。

最後に趣味に関しては、体育・レクと同様、仲間といっしょにを希望する人がどの地区でももっとも多い。とくに中部地区では高くなっているが、東部では若干低い。東部地区の場合は、逆に、専門家を呼ぶ方式を希望する人の比率が高く、この場合は、西部地区が低くなっている。

2　学習活動の実態

公民館が実施している学級や講座への参加度を聞いた結果、調査実施時点の過去およそ1年間に参加したことがある人2割弱を含めて、これまでに参加経験を持っている人は約4割であった。（第6表）

第6表

参加の有無	昭和52年中に参加した	以前には参加した	参加したことはない	無回答	計
比率	18.5	22.8	49.8	8.9	100.0

このように約半数ぐらいの人はまだ一度も公民館の学級・講座に参加したことがないわけであるが、その理由としては（第7表）のようになっている。（おもな理由を2つまであげているので合計は100%をこえる）

もっとも大きい理由としてあげられたのは時間のつごうがつかなかったからということであり、これについで多いのは、どこで何をやっているか知らなかったからと、場所が遠くて不便だからの2つである。そのほかの理由としては、自分の興味や関心にあうものがなかったからという理由があるが、それ以外の理由をあげた人の比率は低い。

全体的なこういった傾向を少しくわしく眺めてみることにしよう。まず、参加状況を男性と女性をくらべてみると、（第8表）に見られるようにかなりの差がある。過去約1年の間に参加したという人の比率は、男性の場合14%であるのにたいして女性は24%、これまでいちども参加したことがないという人は男性では55%、女性は45%である。

第7表

非参加の理由	家をあけられなかった	場所が不便	家の者がいやがる	いっしょに行く人がいない	人前に出るのがいや	興味・関心に合わない	知らなかった	時間の都合がつかない	その他
比率	3.2	12.2	0.8	3.7	1.6	8.8	14.4	19.2	5.1

第8表

性＼参加度	昭和52年中に参加した	以前には参加した	参加したことはない	無回答	計
男	13.9	22.9	54.6	8.6	100.0
女	24.0	23.0	45.1	7.9	100.0

つぎに男性だけを年代別にしたのが（第9表）である。この1年間に参加したという人の比率が高いのは20才代の前半、30才代後半及び40才代前半といったところであり、逆に20才代後半及び50才代以上の場合は低くなっている。今までにまったく参加したことがないという人は、40才代前半が44%でもっとも低く、もっとも高率なのは50才以上の人たちである。この両者を除くと、どの年令段階でも約半数の人が今までいちども参加したことがないと答えている。

一方、女性の場合を見ると、30才代前半の人では50%を若干上廻る人がこの1年間のあいだになんらかの学級・講座に参加したという高率を示している。そして、この年代の前後、すなわち20才代後半及び30才代後半の人たちもかなりの高率を示しているのが注目される。50才以上の人たちでは8%という低率になっている。これまでいちども参加したことがない人の比率では、30才代前半がもっとも低く、この世代の人たちがもっとも公民館の学級・講座との結

第9表

参加度 / 年令	52年度中に参加した	以前には参加した	参加したことはない	無回答	計
20～24才	22.2	22.2	49.3	6.3	100.0
25～29	7.6	38.0	53.1	1.3	100.0
30～34	12.5	32.5	51.3	3.7	100.0
35～39	20.3	10.9	57.9	10.9	100.0
40～44	20.4	27.9	44.2	7.5	100.0
45～49	16.5	21.6	51.6	10.3	100.0
50才代	6.6	15.9	64.9	12.6	100.0

第10表

参加度 / 年令	52年度中に参加した	以前には参加した	参加したことはない	無回答	計
20～24才	18.7	12.5	64.1	4.7	100.0
25～29	25.3	13.9	59.5	1.3	100.0
30～34	52.6	16.2	26.2	5.0	100.0
35～39	31.7	20.0	43.3	5.0	100.0
40～44	24.7	35.9	37.2	2.2	100.0
45～49	20.2	28.7	43.7	7.4	100.0
50才代	8.4	28.6	44.5	18.5	100.0

第11表

参加度 / 地域	52年度中に参加した	以前には参加した	参加したことはない	無回答	計
東　部	17.0	18.9	57.3	6.8	100.0
中　部	22.7	27.7	39.8	9.8	100.0
西　部	16.5	24.3	47.7	11.5	100.0

びつきが強い、といえそうである。また、20才代の人では60%内外の人がいちども参加したことがないとしている。（第10表）

では次に、これらの参加状況を地域別に見てみよう。（第11表）からわかるように、この1年間の参加率としては中部地区がもっとも高く、東部地区と西部地区は低くなっている。しかし、東部地区の場合は以前には参加したことがあるという人の比率は低く、これまでいちども参加したことがない人の比率が高くなっていることを見ると、総体的には西部地区より参加率は低い、といってよさそうである。

次に、これまでいちども参加したことがない人の理由を性別に見たのが（第12表）である。上位の4つの理由は男女ともまったく順位も同じであり、女性の場合に、子どもや病人がいて家をあけられなかったという理由が第5位になっているのが男女のあいだに異なった傾向のようである。

これを男女の年令段階にしたのが（第13表）である。男性の場合とくに強い理由になっていると思われるのは、50才以上の人の場所が遠いこと、40代才後半の人の時間の都合がつかな

第12表

非参加の理由 / 性	家をあけられなかったから	場所が不便	家の者がいやがる	つれがいない	人前に出るのがいや	興味関心に合うのがない	知らなかった	時間の都合がつかない	その他
男	3.7	21.9	1.3	6.2	2.4	21.4	28.6	39.6	12.0
女	9.9	26.7	1.8	9.5	4.4	12.8	28.6	31.6	8.1

（複数回答）

かったこと、そして、20才代後半の人の自分の興味や関心に合わなかったことなどがあげられる。一方、女性の場合には、30才代後半の人の時間の都合がつかなかったこと、20才代後半のどこで何をやっているか知らなかったことと家をあけられなかったこと、そして、20才代前半のいっしょに行く人がいなかったことなどがとくに目立った理由としてあげられるように思われる。

これを地域別に見たのが（第14表）である。東部地区と西部地区ではいずれも場所が遠いことが高い順位であるのに、中部地区ではやや順位としては低いという点にやや地区間の差が示されているのが目につく。

第13表

性	年令＼非参加の理由	家をあけられなかったから	場所が不便	家の者がいやがる	つれがいない	人前に出るのがいや	興味関心に合うのがない	知らなかった	時間の都合がつかない	その他
男	20～24才	3.2	6.4	3.2	3.2	4.8	11.1	17.5	23.8	3.2
	25～29	2.5	12.7		5.1		19.0	20.3	20.3	5.1
	30～34		6.3		2.5	2.5	15.0	10.0	25.0	3.8
	35～39	1.6	12.5		3.1		10.9	18.8	25.0	6.3
	40～44	2.2	6.5	2.2	5.4		7.5	21.5	14.0	4.3
	45～49	2.1	10.3	1.0	1.0		7.2	8.3	23.7	6.2
	50才代	2.8	18.7		2.8	1.7	12.6	15.9	24.2	10.4
女	20～24才	3.1	12.5	1.6	10.9	3.1	7.8	23.4	21.9	9.4
	25～29	10.1	19.0	2.5	8.9	3.8	8.9	21.5	20.3	2.5
	30～34	3.8	7.5		5.0		1.3	6.3	10.0	
	35～39	5.0	6.7	1.7	1.7		3.3	10.0	18.3	5.0
	40～44	1.1	11.2	1.1	2.3	2.3	7.9	10.1	15.7	2.3
	45～49	2.1	10.3	1.0	1.0		7.2	8.3	23.7	6.2
	50才代	3.4	16.0		1.7	2.5	6.7	9.2	17.7	3.4

第14表

地区＼非参加の理由	家をあけられなかった	場所が不便	家の者がいやがる	つれがいない	人前に出るのがいや	興味・関心に合うのがない	知らなかった	時間の都合がつかない	その他
東部	3.6	15.3	0.7	3.9	1.7	9.5	17.7	22.2	4.9
中部	3.9	3.4	0.3	2.8	1.4	9.5	11.8	15.4	5.6
西部	1.8	15.2	1.3	4.2	1.6	6.5	11.8	17.8	4.5

3　大学教育への期待

(1)　能登地区での大学設置

能登地区に新しい大学が作られるとすればどういう大学がほしいと思うかをきいた結果が（第15表）であるが、4年制の国立・公立の大学を望む人がもっとも多く、その次に多い国立・公立の短大と合わせると約半数の人が国立・公立の大学がほしいということになる。

第15表

大学の種類	4年制の国立公立大学	4年制の私立大学	短大（国・公立）	短大（私立）	ほしいとは思わない	不明	計
比率	34.4	1.8	16.7	1.4	37.3	8.4	100.0

現在、アメリカに多く存在しているコミュニティ・カレッジ（地域にそくした内容を勉強でき、無試験で授業料も安い）が能登地区にも出来たらいいと思っている人が半数近くを占め、そうは思わないという人よりもたいへん多くなっている。（第16表）そしてあったらいいと思っている人のうち、30%近くの人は、入学する気持を持っている。

あったらいいなという気持を持っているのは男性では46.2%、女性では32.8%であり、とくに40才代前半の男性にその気持が強いようである。また、そういう大学が出来たら入学したいという気持もこの層の人の場合には強いことがうかがえる。

第16表

		思　う	思わない	わからない	無 回 答	計
全　体		45.1	16.4	23.3	15.2	100.0
男	20～24才	47.7	25.4	19.0	7.9	100.0
	25～29	50.7	10.1	31.6	7.6	100.0
	30～34	48.8	15.0	23.7	12.5	100.0
	35～39	53.1	9.4	26.6	10.9	100.0
	40～44	63.5	16.1	15.0	5.4	100.0
	45～49	48.5	17.5	21.6	12.4	100.0
	50才代	46.2	17.6	13.7	22.5	100.0
女	20～24才	32.8	26.6	29.7	10.9	100.0
	25～29	44.3	19.0	30.4	6.3	100.0
	30～34	42.6	25.0	18.7	13.7	100.0
	35～39	44.9	11.7	31.7	11.7	100.0
	40～44	39.3	19.1	27.0	14.6	100.0
	45～49	40.5	10.6	25.5	23.4	100.0
	50才代	32.7	14.3	28.6	24.4	100.0

(2)　金沢大学の開放活動に関して

金沢大学に大学教育開放センターが設置されていることを知っていたという人の比率は全体では12%であり、男性では20.3%、女性では5.0%と、男性の方がかなり比率が高い。男性では50才以上の人、女性では40才代前半の人の場合が、他の年令段階にくらべて、知っていたという人が多くなっている。（第17表）

金沢大学開放センターの公開講座が能登島町で開かれたら参加するかどうかについては全体としては、内容によって参加すると答えた人が第1位であり、時間や場所の都合がよければ参加するという人が第2位で、この両者を合わせると半数をこえる。参加しないという人は1割弱であり、かなりの人が参加の意志を持っている。といえそうである。

これを性別にみると、男性の場合は、内容次第という人がもっとも多いが、女性では、時間や場所によってという人がもっとも多いというちがいを見せている。参加しないという人となんともいえないという人を合わせると、男性では23.4%、女性では33.1%であり、女性の方がいくらか多いようである。

第17表

性	年令＼認知	知っていた	知らなかった	不　明	計
男	20～24才	9.5	85.7	4.8	100.0
	25～29	13.9	82.3	3.8	100.0
	30～34	16.2	80.1	3.7	100.0
	35～39	14.1	76.5	9.4	100.0
	40～44	15.0	81.8	3.2	100.0
	45～49	12.4	83.5	4.1	100.0
	50才代	20.3	73.7	6.0	100.0
女	20～24才	9.4	87.5	3.1	100.0
	25～29	5.1	93.6	1.3	100.0
	30～34	6.2	88.8	5.0	100.0
	35～39	3.3	88.4	8.3	100.0
	40～44	14.6	82.0	3.4	100.0
	45～49	7.4	87.3	5.3	100.0
	50才代	5.0	89.1	5.9	100.0

（古野　有隣）